

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可  
令和七年七月一日発行(毎月一回一日発行)  
第二十四卷 第四号(通巻二八〇号)

# 万象

B A N S Y O

七月号

2025. 7



七月の句

空蟬の何を見て来し眼かな

飛 高 隆 夫

蟬は生涯の大半を土の中にいることになるが、土の中で何を見、何を思っているのか、また地上での短い日々にはどんな世界を見ているのだろうか、と、空蟬の眼を凝視し語りかけている。

即物具象にもとづく写生俳句の修練において何より肝要なことは「見ること」であるとされるが、氏は観察のための長考も厭わない。

掲句では自然科学的な問いかけとともに、時間と空間を自在に操る近代詩研究者としての作者の生命への賛歌を窺うことができる。

(句集「川あかり」所収)

(中鉢弘二)

# 万 象

令和7年7月号

主宰作品 矢車菊 ..... 江見悦子 4

万象の窓<sup>④⑩</sup> ばら二題 ..... 江見悦子 5

名誉顧問作品 黒揚羽 ..... 小林愛子 6

## 風音集

..... 中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・中條 睦子  
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子  
榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

7

風音散歩<sup>③②</sup> (七月号) ..... 小林 愛子 10

## 同人作品

江見悦子選 ..... 11

同人作品の佳句 ..... 江見悦子選 31

同人会だより ..... 富士市と葛飾北斎の富嶽三十六景 ..... 神田美穂子 32

5月の「万象」オンライン同人句会高点句

珈琲ぶれいく<sup>⑥②</sup> ..... 33

佳句佳句しかじか ..... 同人作品鑑賞 (五月号) ..... 沢辺たけし 34

私のこの一句 ..... 吉中 愛子・亀田やす子・岡本 敬子・神田美穂子 36

令和七年

七月号

# 万象

BANSYO

ゆつくり大きく

深呼吸

心静かに

耳を澄まして

天の声を聴く

玉置妙憂

|                       |                                       |          |    |
|-----------------------|---------------------------------------|----------|----|
| 北から南から                | 神奈川県支部吟行句会（川崎）                        | 新妻 奎子    | 37 |
| 続・風のしをり <sup>①⑨</sup> | 子規と私（六） 細見綾子                          | 編集部      | 38 |
| 万葉の抒情 <sup>②③</sup>   | 『万葉集』にたずねる抒情の源流 <sup>②③</sup>         | 橋本 清     | 39 |
| 万象ノオト「コップ」            | 杉田 義則・小林あけみ・矢野喜久江<br>入山 繁幸・荒井 仁・佐々木 茂 |          | 40 |
| 巻頭作家（六月号）プロフィール       | 井端 久子（金沢）                             | 南 恵子     | 42 |
| <b>万象作品</b>           | <b>江見悦子選</b>                          |          | 43 |
| 万象作品の佳句               |                                       | 江見 悦子    | 54 |
| 新中央句会報（4月例会）          |                                       |          | 56 |
| 第18回「万象」千葉県支部俳句大会 報告  |                                       | 塗木 翠雲    | 59 |
| 〈編集部から〉「ノマ点」をめぐって     |                                       | 中村 千久    | 60 |
| ルビーの小函（七月号）           |                                       | 編集部・校正担当 | 61 |
| 東西南北                  |                                       |          | 62 |

矢車菊

江見悦子

(主宰)

あさなさな櫟の花を掃く男  
寺町の空の広さを初燕

狐雨なんぢやもんぢやの花けぶる

松戸宿の坂川

坂川の土留め崩るる棕櫚の花

萱門へ長き坂道風薫る

教卓にカルミア一枝聖五月

矢車菊ま青ファラオの棺の上

## ばら二題

江 見 悦 子

立夏を過ぎて10日、東京では薔薇の美しい季節です。私の住むマンションの隣の高井戸中学校では、この時期「アンネのバラ」が一斉に開き、正門から昇降口まで100mほどの通学路が、薔薇の美しい色と香りで見事に華やかになります。

高さ80cmと低木で、蕾の時は赤、開花後は黄金色、サーモンピンクと色が変わり、17の花弁を持つ薔薇が中学校にやって来たのは今から50年前のこと。国語科の先生が「アンネの日記」を教材に、生徒に「アンネへの手紙」を書かせ、文集をアンネの父オットー・フランク氏に送ったことがきっかけでした。オットー氏との交流が始まり、様々な人たちの協力があつて「アンネのバラ」と名付けられた株が届いたのです。この薔薇は「アンネの日記」に感動したベルギーの育苗家によって作られ、オットー氏に贈られたことが知られています。スイスから届いた薔薇は3株、それが今では大小200株を超えているとか。満開の時期には一般公開され、杉並区の誇りとして、私も眼福の恩恵にあずかっています。

綾子先生の随筆集『花の色』（昭53）の中の「薔薇」の頁に、欣一先生が登場します。

夫も薔薇の世話だけによくしてくれた。はさみを持ち出して花をさるのはいつも夫である。伊賀焼の花瓶に花をさす。長し短しをも考えず、ただ切つて来て、すばとさしただけの花が、この伊賀焼にはよく似合った。（中略）薔薇を切るのは夫にまかせた。私は、ほとんど、薔薇を切らなかつた。（中略）夫のさした薔薇は、どのようにも、新鮮味をもっていた。

欣一先生の最後の句集『綾子の手』（平12）の目次の前に、欣一先生の手による薄紅の薔薇一枝が色鉛筆で描かれています。句集のあとがきには「この句集は綾子追悼のものとなった。毎朝、遺影に水を供えているが、まだ故人となった実感が湧かない。わが家の庭では今、薔薇の花盛りである」とあります。中学生の時、東京美術学校へ進学したいと思っていた欣一先生の薔薇の絵は、気品にあふれて瑞々しく、優しさに満ちているようです。

# 黒揚羽

小林 愛子

(名譽顧問)

箸を取る瀬戸八寸に焼き鱈  
春の夜ギター聴き得し深ねむり  
椅子置けば風の絡みて春深し  
蜥蜴消え石に残像の縞模様  
みずみずしき切り花届く雷のあと  
はなびらの縁に寂れや夜の薔薇  
樹下の日を裏返したり黒揚羽

万

緑

中村千久

(編集人)

万緑にカーブミラーのふくらめり  
しづけさといふ音棲みぬ五月闇  
緑蔭にたどる晶子の歌碑いくつ  
万緑へ四角くひらく大手門  
漆喰の壁へ薨へ風あをし  
万緑といふ不揃ひのみどりかな

彼岸

福島せいぎ

(顧問)

街川に鰯が来てゐるさくら時  
海見ゆる同窓会の白魚汁  
仏壇にあんぱん二つ入彼岸  
彼岸くる鳥も仏ものにぎはしく  
春障子はづして寺に人あふる  
甘党の犬と分け合ふ彼岸菓子

花は葉に

柳澤宗正

(顧問)

海に出て揉まるるばかり花筏  
卒塔婆の軋む墓苑や躑躅燃ゆ  
北欧の白き客船夏来る  
トランプに翻弄されて花は葉に  
葡萄棚芽吹く湖畔のカフェテラス  
水郷の果て無き植田空映す

春北風

中條睦子

(同人会会長)

朝桜くぐりて来り魚市場  
阿波の土つけて売らるる春筍  
牡丹を数へしづかに充電す  
春北風海くろがねに波尖る  
蜷の路城址を巡り来し流れ  
立山を越え来て高しつばくらめ

花の塵

松原智津子

(北海道)

教会の讃美歌のどか朝な朝な

澄めばとて鳥引く空の淋しかり

華げる後の虚しさ花の塵

アイヌ柄の莫塵敷きコタンのピクニック

花時計三時の針は黄のパンジー

柿若葉

亀田やす子

(栃木)

菜種梅雨音も立てずに水車

麦秋や農免道路に揚げ物屋

柿若葉枝に留るデデッポー

雨催ビニルで被ふ花芍薬

夏草を分けて颯の突つ走る

朧

沢辺たけし

(千葉)

龍天に登り筑波の峰に日矢

ガラスペンにからまるインク風信子

水濁り動き早まる蝌蚪の鰓

藻の色のよどみ突きぬけ蘆の角

タンカーの島となりたる朧かな

青梅

吉中愛子

(東京)

巢の前を裏返りたる初燕

墓鳴くや桂郎の墓あのあたり

をがたまの香気を言へり刀鍛冶

藤房の雨に梳かれてゐたるかな

青梅の落ちて集まる水溜り

波の音 榎本文代

(神奈川)

うららかや小石引きゆく波の音

風荒ぶ楊貴妃桜見し夜は

乳飲み子に粥のひと匙花は葉に

夜も白しなんぢやもんぢやの花の雲

江戸川の風に乗りたる夏燕

立 夏 神田美穂子

(静岡)

枝枝に零るる鳥語芽吹き山

パスワード入れて朧の月仰ぐ

牧のどか蒲公英の絮とんでとんで

ビー玉を立夏の指が色弾く

風青しバツシユの紐をぎゆつと締め

星月夜 井村和子

(石川)

榆芽吹く北の都に娘の暮し

潮の目を近くに岬昆布乾す

星月夜沖の白波交響す

買ふで無く通り抜けたり苗木市

水亭の脚下たゆたふ花筏

欣一の風 前田貴美子

(沖縄)

欣一の風清明の野のはたて

天霧らふ辺戸の岩間の白薊

みなふれて離れて句碑を霞みけり

海ひらく白詰草の野に濡れて

行く春へ辺戸の山霧流れたり

## 風音散歩

③2

(七月号)

小林愛子

海に出て揉まるるばかり花筏

柳澤宗正

「花筏」は水面に散りしいて流れる桜のはなびらを筏に見立てて言い、また花の枝を折り添えた筏にも言う。

掲句の花筏は海に流れ着いたところで景がひろがった。同時発表に「北欧の白き客船夏来る」があり、横浜港界隈か。「揉まるるばかり」は行き交う船の航跡として生まれる泡や波の襲来。繰り返す波音に春も終わりの気怠さが漂う。

欣一の風清明の野のはたて 前田貴美子

「清明」は二十四節季の一つで、陽暦では4月の5日頃。清浄明潔の意。「欣一の風」とあるのは沖繩の辺戸岬に建立の「夕月夜乙女の齒の波寄する」の句碑に吹く風と、「風」の連中を率いる沢木欣一主宰に吹いた追い風を示す。

昭和55年8月が句碑除幕式であった。当時は文字通りの「野のはたて」であつたが今は賑やからしい。しかし句を一読して「清明の野のはたて」に、句の品位が立ち上がる。

墓鳴くや桂郎の墓あゝあたり 吉中愛子

墓の主の石川桂郎。明治42年8月6日、昭和50年月116日。66歳。晩年多病の内に「風土」を中心に活動。句集、著書多

数。(裏がへる亀思ふべし鳴けるなり

桂郎)

作者の散歩の園内に墓があるのだろう。「あゝあたり」とは「又来ましたよ」という挨拶。今日は墓が鳴いていた。

ガラスペンにからまるインク風信子 沢辺たけし

「ガラスペン」は言う迄も無く、付けペンの一種でガラス製、毛細管現象によつて薄にインクが吸い上げられる。インクの色は青か紫か。「からまるインク」が美しい。

窓辺に見るは風信子。昔、アポロンが見染めたというハンサムな若者の、又の名ヒヤシンス。紫花の花言葉は哀愁、嫉妬。句は感覚が働き、韻を踏んでリズムカルである。

牧のどか蒲公英の絮とんとんで 神田美穂子

たんぽぽは最も代表的な野の花。「和名抄」に「タナ」とあり、田畑などに生えるので「田菜」という。「たんぽぽ」は「田菜ほほ」からくるもので「ほほ」は実の「ほほけ」を指すという説がある。句の「とんとんで」が秀逸、字余りで絮が果てしなく広がる。意味よりも、映像が鮮明である。

乳飲み子に粥のひと匙花は葉に 榎本文代

掲句は、乳飲み子が離乳期に入ったというのである。外に目をやれば、桜は散つて葉が出て美しい緑を広げはじめた。

「花は葉に」は、「葉桜」の副季語。この言葉には、もはや花が終わったと振り返り惜しむ思いと、桜若葉の新鮮さに希望をもつて愛でる思いとが交錯する。句は勿論後者である。

# 同人作品

江見悦子選



札幌 岡本敬子

春の水牧の柵より畑より  
語りたき人逝き春の星潤む  
下萌や野の花代はる代はる咲く  
順番を決めたるやうに囀れる  
養花天すこしこぼるる粉ぐすり

札幌 林陽子

逆上り上手な少女春の風  
囀の道ゆつくりと病院へ  
春の月母の寝顔に話しかけ  
老犬の鼻近づけて露の莖  
酒蔵の白壁剝れ春一番

札幌 落合裕子

庭の花一番乗りは松雪草  
春寒や乾きし道を又濡らし  
書込みの多き暦や弥生果て  
梅枝にごま粒ほどの花芽かな  
橋脚に白波激つ雪解川

札幌 濱谷和代

草むらの湿りは雪解滴かな

編隊の高き低きや鳥帰る  
そちこちの土を押し上げ草萌ゆる  
師の計報届くメールや花の冷え  
退職の机の整理春の塵

札幌 大内和憲

鳥声に朝寝の端の白みある  
断崖に風のいろいろ鳥交る  
保育器の欠伸次々春の昼  
囀のなだれ込んだる羅漢堂  
岩海苔摘む日をたたへ潮たたへつつ

札幌 紅露恵子

枝先の明るさ赤さ木の芽張る  
とびとびの白き花へと初蝶来  
とろとろと木苺のジャム春の雨  
開拓の礎の杜百千鳥  
チューリップの赤花束に誕生日

札幌 大内マキ子

馬の背に日の矢飛び来る厩出し  
春宵や灯影揺れゐる船溜り  
ひと蹴りに海女春潮の渦となり

せせらぎの音を束ねて芹を摘む  
花冷えの来ぬ人偲ぶベンチかな

札幌 中鉢弘一

櫛の木の張り根の窪み雪解水  
解かるるを待ちて膨らむ雪囲  
春の湖水底透ける青緑  
観音の千手のごとき新樹の枝  
花は五分結ぶも解くも今日の風

札幌 北浦詩子

足元を過ぐる水音春めけり  
花御堂海を見下ろす幼稚園  
北窓を開く畳に日のやはら  
春風や待合室に時計鳴る  
岩跳ぬる飛沫の白し春の闇

札幌 谷廣司

吾に吹き落葉松に吹き彼岸西風  
初蝶や粗き木肌の岳樺  
春スキー眩きものは樺の梢  
春月や遣されし子の笑ひ声  
雪解水山裾を越え車道越え

江別 佐藤

哲

陽の匂ひ吸ひつくしたる干大根  
笹起きの音斑雪野のそちここに  
牛十頭ゆつさゆつさと春の朝  
雪を漕ぐ背に力あり孕み牛  
天心に闇寄せつけず月冴ゆる

江別 太田 佳美

壁紙を替へて迎ふる春の客  
雪解野に大枝小枝突きささり  
幼子と丘で遊びし櫛しまふ  
坪庭の三葉二叢解け初む  
下萌や堆肥の臭風に乗る

新潟 高橋 ひろ

晩春の温もりと知る足の裏  
賑やかな下校の時間燕の巢  
初燕通しただけの空残る  
燕の巢三つかつては瀬戸物屋  
人避けて一人住む人山椒の芽  
ばらばらに雀沈めり春の土

新潟 高野 松風

白銀の守門岳をはるか耕せり  
真つすぐに湖心へつがひ残る鴨  
黒黒と幹うすじめり里桜  
芽柳や奥にひと刷け白き雲

益子 光岡 れい子

<sup>かんき</sup>巫の箒目正し花すみれ  
何もせぬひと日もありて桜餅  
白鳥去り川辺の黙に羽ひとつ  
花菜風小さく抱き合ふ道祖神  
散る桜ひとひら浮かす茶碗酒

芳賀 大村 かし子

一雨に全開したる姫辛夷  
花曇独りの昼餉卵とぢ  
青麦や一雨毎に丈伸し  
農道の舗装の割れ目草萌ゆる  
SLの汽笛は遠し花菜風  
花の下角にリボンの山羊二匹  
雪解やダムに沈みし村二つ  
尾名川の堤の桜月夜かな

宇都宮 阿久津 勝利

麦青む朝の光に直<sup>ひた</sup>青く  
川波の光を浴びて猫柳

栃木 上岡 佳子

檜芽吹きいのち漲る山路かな  
釣糸の水輪にくづれ花筏  
春風や巢に立ち上る鸛のひな  
見渡し<sup>み</sup>の菜の花堤巴波川  
飛花落花五十五貫の力石

佐野 増田 幸子

隠沼にゆらく薄日や彼岸明け  
三龜嶺の桜白じら夕淡し  
尖りたる青蘆に雨けぶるかな  
青柳の風をうべなひ風いなす  
大鷲の舞ふ清明の朝ほらけ

佐野 加藤 季代

春寒の本堂揺らし護摩太鼓  
深閑と刻の過ぎゆく座禅草  
桜散るまして暮色は去り難し  
行き摺りの足湯に桜吹雪かな  
一円の切手を捜す菜の花忌

佐野 阿部 澄

山伏の直<sup>ひた</sup>打つ太鼓呀返る  
法螺の音に法螺の音応ふ鳥雲に  
山寺の斜面に長くる蔭の聲  
のどけしや電子辞書より雉の声  
入学式学生服のみなゆるゆる

佐野 芝宮 留美子

三龜嶺の裾に住まふや梅真白  
峠道亜麻色の木木芽吹きけり  
県境の橋は菜の花明りかな  
浮雲やしどけなく散る紫木蓮  
早咲きの躑躅の赤や向う岸

佐野 島田 和枝

弥生はや遠山空に溶けゆけり  
廃校に残る煙突春満月  
片言のふゆる赤子や猫柳  
閉したる落人の里春の雪  
揚雲雀落つ一望の遊水地

佐野 売野 緑

鸛の嘴かちかちと抱卵期

雉子鳴く城址に隣る我が家かな  
螢鳥賊の目玉ぷつんと忌を修す  
信濃路の真青なる空花辛夷  
三方に分かるる野川花吹雪

佐野 店 網 洋 子

春雷や話途中の受話器切る  
パッチワーク展出て蓬餅提げて  
青麦の波ゆるやかに走りけり  
白山吹開く庭先夕明り  
診察の順を待ちたり君子蘭

足利 大 木 茂

画廊出て街は柳の雨となり  
穂の芽に三日続きの山の雨  
ちよつとこい裾廻に對の道祖神  
雉走る間口五尺の防空壕  
田一枚隔て雉子の脅し合ふ

土浦 澤 照 枝

山の辺に小さき蕎麦屋梨の花  
空つばの牛舎に花の吹き溜る  
八方に鳥の声して花の山

沈丁や石段下の六地藏  
花桃に明るき風の吹き渡る

加須 茂 木 弘 子

餌運ぶ焼野を低くこふのとり  
身ほとりの『青嶺』繙く春三日月  
音弾む幅一尺の春の川  
葉の花の膨るる堤風渡る  
火渡りの列のひとりや花の下

さいま 山 本 右 近

佐保姫や足からのほりくる眠気  
杉戸絵の虎と目の遇ふ彼岸寺  
野火止へ逃水を追ふ平林寺  
桜まじ洞にけぶれる潮仏  
八十路なほときめきのあり苗木植う

所沢 三 好 か ほる

巢ごもりの鵜へ大粒の雨ななめ  
降り出せる雨にけぶりて初桜  
幼子のことこ歩きチューリップ  
蘆牙に手こぎの舟の波及ぶ  
花の雨出窓にホルトの土人形

所沢 南雲 秀子

母の背に手を振る赤子雪柳  
弁当を犬と分け合ふ花の下  
若楓水面に映えて石の橋  
花菜畑庄屋門まで続きたり  
人影のなき碓水湖や山桜

千葉 田中 道江

悼 内海良太名譽主宰  
ふたなのかみなめか  
二七日三七日春は寂しかる

初蝶や能登よりの人來るといふ  
緑青の首大仏や花の雨  
川波をななめに渡舟花吹雪  
品書を眺めてすぐる花の昼

千葉 松浦 陵保

枝先の新芽の色のいと淡し  
荒川の岸に抜がる花菜畑  
竹の秋幹叩き合ふ音高し  
薫風やまわたし宿の百羅漢  
兄弟乾通りの花見かな

千葉 喜多恭 仁子

はにかみてブーケを父へ卒業子

千葉 大月 玲子

春雷や法話の声の途切れたる  
花満開老舗ホテルの歴史閉づ  
入学式終へて駆け出すランドセル  
のどけしやあんパン買ひに銀座まで

AIに答をもらふ臆かな

春光や部屋戸どこも明け放つ  
飛花落花窓一面の句座開く  
たんぼの暮れゆく土手を帰りけり  
チューリップ翳りひとつもなかりけり

千葉 竹澤 竹里

黒鯛跳ねて魚拓の和紙に墨が飛ぶ  
花筏流れ流され大利根へ  
毘沙門の縁日に舞ふ花吹雪  
全山を覆ふ真白き花吹雪  
千枚田一族総出の田植かな

佐倉 大内 佐奈枝

はくれんの落花の錆の湿りかな  
十二単と云へど紫ひといろに  
空堀になだれ菜の花あふれたり

かぶりつくパンをはみ出すレタスかな  
孔雀いま遠足の子に羽ひろぐ

佐倉 三屋 英 俊

鳥雲に磯の窪みの忘れ潮  
うたかたは魚のつぶやき鳥雲に  
せせらぎは水のささやき風光る  
鳥雲に能登の浜屋の夕けむり  
森森の代田に利根川の匂かな

佐倉 横川 良 子

国境てふ不確かなもの黄砂降る  
行列の少し緩びて夕桜  
いまさらの昭和百年春の闇  
花筏寄りて離れて櫂の先  
菜の花や嘗て牛舎のがらんどう

四街道 奥 太 雅

造成の看板囲む花なづな  
春窮や瑞穂の国に米騒動  
蟻出でて地球の欠片運び出す  
信楽の狸佇む花の雨  
蜥蜴出て総身を曝す犬走り

四街道 塗 木 翠 雲

輝きつ日の斑を散らす野梅かな  
春耕の畑に鋤き込む粃の殻  
職退きてひと日の長し菜種梅雨  
蛙鳴く泥田に脚を浸しけり  
沼風に大きな口開く蝮蛇草

船橋 山下 良 江

遠くより人声届く春の窓  
売店に春筍や久留里線  
観音も地藏も浴ぶる花吹雪  
春雷のどんと音してそれつきり  
春風と共にたはむれ柿若葉

船橋 赤 堀 洋 子

花吹雪ころがるやうに道走る  
雲間より桜大樹へ日の洩れて  
樟大樹春の落葉が紅く舞ふ  
太宰の碑かたばみの花敷きつめて  
お稲荷に春手袋の落し物

船橋 久保村 淑 子

母の忌や薄紅帯ぶる猫柳

白蝶と白蝶の影ついて来る  
川に沿ふ花葉の蛇行どこまでも  
片減りの癖あるシューズ春休み  
煙草一本所望してゐる啄木忌

船橋 片桐 帆 一

連翹の明かりに母と子砂遊び  
散る椿一日雨の散歩道  
下総の白鳳仙や春の雷  
母の呼ぶ声かも知れず散る桜  
鉄瓶のたぎりてゐたり春の風邪

船橋 宮本 加津代

小躍りの春の小川へじやぶじやぶと  
夫なきは日暮に似たり紫木蓮  
独り居の気ままと不安月おぼろ  
初ものの筍飯のおこげかな  
青空へあふれて辛夷咲きにけり

船橋 中嶋 久登

花屑の一つまみ置く一茶句碑  
甘き香の眩くもろみ春寒し  
春愁や酒蔵継がぬ九代目

黄砂入れ天地返しのリーム層  
賑やかに水草生ふる川の底

柏 山本とく江

富士の嶺に白雲浮かぶ仏生会  
窓開くグループホーム花吹雪  
川風に絵馬鳴る宮の初桜  
花筏組み変はりつつ角曲がる  
富士浮かべ裾より晴るる朝霞

柏 内田 郁代

花重漱石の句を口遊み  
乾く音して真白なる花馬酔木  
春雷やドヴォルザークを聴きをれば  
どの木にも明るき声の春の鳥  
花筵少女寄せ合ふ膝小僧

柏 古川 京子

つくつくし一句心にむずむずと  
蛙塗りの機械四隅を塗りそこね  
鳥帰る工場地帯の空を逸れ  
参道に長束子買ふ蝶の昼  
手土産の小さきを選ぶ花の雨

流山 穂 莉 照 子

春泥を猫軽やかに渡りけり  
絡みたる日差し重たし糸桜  
花楸無縁仏へ降り止まず  
花疲れ留め具外れぬネックレス  
かたまつて眠る小犬や春の星

東京 名 和 政 代

永き日の関守石は陽を弾く  
スキップで親を離るる一年生  
瀬戸内の波おだやかに摩耶詣  
大生簀尾鰭の赤き桜鯛  
自動車の修理工場つばめの巢

東京 藤 田 裕 子

雨あがるイタリア山に初蝶来  
引越しのトラック花を散し行く  
耳を当つ芽吹く銀杏のこはき肌  
水盤に朝のさざなみ灌仏会  
イースターの朝のトースト香しく

東京 島 野 ひ さ

白寿まで元気で生きん老桜

玄関に迷ひて来しか花の塵  
ランナーの落花の道をもう見えず  
子鴉のゐるらし親の大きな  
引鴨の沼は釣竿ばかりかな

東京 加 賀 葉 子

桜海老混ぜ特上のかきあげ井  
髪切つてモンローウオーク春の服  
大紫堀の内より湧きあふる  
舞ひ上がり風をあやつる花吹雪  
登り来し天狗の山の霞みをり

東京 久 留 島 規 子

春分の日差しの中へ踏み出せり  
囀や谷の底まで異人墓  
春昼や茶釜の滾る四畳半  
花時の洋館暗し古ピアノ  
かたまりてやがてほどこけて花筏

東京 下 嶽 孝 一

乳呑み児の眼が追ふ庭や雀の子  
山神へ謝意の一礼わらび摘む  
風光る離乳はじめの銀の匙

真青なる空をくすぐり青かへで  
連れ立ちてめぐる庭園蝶の昼

東京 草間三香子

唄の道 一步 一步や花通草  
露座仏の眼下にさやぐ諸葛菜  
学僧の特大やかん仏生会  
絶え間なく落つる水音猫柳  
川底をなびく藻の影残る鴨

東京 岡村純子

咲き満ちて今朝また一花シクラメン  
木洩れ日の揺れて飛び翔つ百千鳥  
雨粒の連なる瑞枝芽吹きたる  
いやいやと知恵つく稚児や芽吹き急  
夜桜や飲屋の椅子のはみ出して

東京 桑原優美子

流るるにつれて整ふ花筏  
老人の小さく坐る花見かな  
花冷えや血圧計に腕預け  
春眠や山手線の内回り  
ジャズ喫茶アップテンポの春の宵

東京 三村紀子

声若き女あるじや花蘇芳  
水郷を示す道標風光る  
和服着て花人となる異邦人  
野遊や水の音へと走り出す  
老犬を手押し車に花見かな

東京 小池清晴

紫に変はる境内藤垂るる  
越後屋の暖簾を掠めつばくらめ  
新入生迎ふる朝チューリップ  
一合を妻と分け合ふ花見酒  
吉原へ続く桜や山谷堀

東京 一由久美子

沈む日に向けて舳挿す小舟かな  
見上げるミモザの空に昂れり  
関帝廟の屋根に籠るる遅日かな  
走り根の上を走り根さへづれり  
引く波に小石さりさり鱗東風

武蔵野 砂地宏子

川船の舳先が分けて花筏

暮色濃し柳絮降りつむ川堤  
蒲公英の絮は真白ぞ風を待つ  
少女らの脚伸びゆけり夏は来ぬ  
突出しの空豆三粒あさみどり

立川 正田 華子

風光る園児手を振る向う岸  
春筍や防空壕の口暗し  
うらけし大福の餡練り上ぐる  
取り替ふる藍のカーテン暮の春  
堇草崖の木洩れ日ほしいまま

町田 広瀬 俊雄

てつぺんの胞子をとばすつくしんぼ  
金蘭の咲き乱れたる雑木山  
ゆつたりと春風抜くる荻外荘  
病床に電話のありて柿若葉  
一寸の小さき仏や花御堂

町田 桔梗 純

朝の雨ひかりとなりて雪柳  
明神を出で神田まで花の道  
うつさうと芽吹く楓や水の音

旧邸にピアノの部屋や風光る  
花の雲幻戯山房出でてより

日野 喜多尾 明子  
※幻戯山房……角川源義旧宅

苗木市見尽くして買ふ小さき鉢  
落椿あまた兵士の打ち斃れ  
大江の忌過ぎ大樟の春落葉  
引き近き鴨や旋回くり返し  
山笑ふスケボードつと練り出して  
新宿の屋上ゴジラ春愁

横浜 西本 才子

釣宿の外の流し場春蚊出づ  
湧き水に玉石を積む芹の水  
堰落つる水きらきらと春の鴨  
海の風吹き上げ来り茨の芽  
霧笛橋海へ枝張る花辛夷

横浜 大橋 雅子

笛太鼓の稚児行列や花まつり  
花まつり稚児は目尻に紅を差し  
富士山掲げ湖抱へ山笑ふ  
ロープウェイに響く春雷身を締め

一斉に銀杏並木の芽吹きけり

横浜 山崎 郁子

松島へ大学生の春休み

百歳の庭に散り込む糸桜

進級すパンを並べるアルバイト

柿の木の新緑美しき友の家

紫木蓮色増しゆきて通学路

横浜 田賀 榎恵

スリットの深きスカート風五月

友訪ぬ薔薇の垣根を目印に

樟脳は祖母の匂よ樟落葉

ペンを持つ指の湿りや麦の秋

青蘆のそよげる風の匂かな

横浜 三木 豊子

能楽堂門前に掃く花の塵

胸高の袴姿の卒業す

ピエロ吹く虹の光やしやほん玉

利休忌や葉の花挿して茶を供ふ

花曇関帝廟に待ち合はす

横浜 星野 信子

横浜の風に慣ひてチューリップ

石庭に三猿の居て花祭

フリージア白しカレーの香は強し

横浜の春夜を灯す観覧車

巢作りの忙しき烏日暮どき

川崎 新妻 奎子

人の輪の真中に垂るる糸桜

花冷えや嗽手洗ひ肅々と

しやほん玉追ひかくる子ら波の音

ベルト穴一つずれたり鳥雲に

新しき組板に切る花葉漬

川崎 大久保 進

ワイパーののたりのつたり春の雨

一雨に房の整ふ藤の棚

流木の枝のささくれ鳥雲に

花冷えの齒医者椅子に力みゐて

終電の見知らぬベンチ春の闇

鎌倉 恒川 清爾

春の雨赤い靴の子年取らず

鐘や皆海を向く異人墓碑  
あたたかや角のめくれし広辞苑  
春灯や振子ゆつたり掛時計  
校歌には武運長久つばくらめ

伊勢原 佐藤 和子

浜風にちりちり乾く若布かな  
九十九里の浜うす紅に桜貝  
我が庭の赤松の芯小指ほど  
放牧の牛の背すべる落花かな  
筍を茹でガス台を占領す

静岡 大村 峰子

糸桜纏れし枝を風の解く  
黄砂ふる南アルプス消えし朝  
鶯の声を目の追ふ朝かな  
農小屋の進まぬ時計芽吹山  
青餠に亡き師の一句偲ばるる

静岡 海野 みち子

十葉や母在りし日の常備薬  
初桜土手の小道を杖つきて  
弁当に載る花びらの二三枚

春眠や夫に呼ばれてゐるやうな  
黄水仙抱いて無沙汰の夫の墓

静岡 宮崎 知恵美

産土神の鶯の声弾みたり  
水仙の根元に猫の時かな  
師の訃報雪の別れとなりにけり  
落味噲や越後訛の母浮かぶ  
真白なる野焼の煙空に消ゆ

静岡 望月 敏男

春ともし万年筆の師の遺品  
銀色の薬缶を畦に耕せり  
黒白の鍵盤奏す春の宵  
鳥帰る十年前のパスポート  
蒲公英や熊除けの鈴駅に吊り

静岡 藤原 千代子

四月馬鹿こませで鯛を釣ると言ふ  
農具市のテントを剝す富士嵐  
菅笠のはつかに傾ぐ種案山子  
木の陰の獣の匂ひ蕨狩  
蜜蜂竹根満さんを懐くの帯と旅立ち師の許へ

静岡 荻野加壽子

蠶や昔の音の掛時計

出席簿に並ぶ出の字あたたかし  
恐竜の骨につなぎ目木の芽冷え  
ランドセルの思はぬ重さ初桜  
カーテンを割り春月に溺れたる

静岡 小川明美

禰宜復習ふ祝詞蛙の目借り時  
枯山水の滝なる岩へ枝垂梅  
藍甕を守る明王へ春の塵  
白子漁果て配線を繕へり  
師逝くやときに激しき菜種梅雨

静岡 藤本節子

酒蔵を巡る雪解の伏流水  
水底に日差しの乱射藻草生ふ  
春風や右に左に犀の耳  
春の宵防犯カメラに猫の影  
標本の目玉空洞花の冷え

静岡 大長文昭

床高き登呂の祭殿田螺鳴く

春泥へ白犀いばり放ちけり  
み仏へ広く開けおく春障子  
春星や満点句集編みて逝く  
花蘇枋地の紫を吸ひに吸ふ

静岡 加山ひさ子

春風や土手の草草はや目覚め  
ピクニックズボンの裾の濡れてきし  
リヤカーの太きタイヤに苜蓿  
春風に撫でられてをり鬼瓦  
合流の水の勢ひ木の芽晴

静岡 石川裕子

囀の降るや河原の水たまり  
綾取りの川から橋へ春炬燵  
田起しや飛行機雲の帯低く  
手の平に椿の赤の重さかな  
登校の列の真中に一年生

静岡 本多ひとみ

苗札や片仮名だけの癖の文字  
水神の祠に触るる黄水仙  
麓までそよぎにそよぐ竹の秋

人の背をとうに越したる竹煮草  
山峡の瀬音涼しき樵小屋

静岡 杉 澤

修

山頂に電波塔二基鳥帰る  
一山を夕日に晒し黄砂降る  
連翹や雨の明るきをんな坂  
春筍の山の香こぼし売られをり  
風を待つ白もくれんの飛ぶ構へ

射水 成瀬真紀子

鳶口にあふりなだむる野焼かな  
能登に季のめぐり紅白藪椿  
もう飲めんかと最後の言葉春寒し  
シューシューとエクモの呼吸春の闇  
春分の黒雲開き夫逝けり

金沢 今越みち子

チンドン屋熱演終へて花の陰  
のどけしやチンドン響く町の中  
赤土の山田の田螺目立ちたり  
隠し田の田螺吹く泡浮き上がる  
あたたかや我が居眠りの車椅子

金沢 伊藤美音子

下萌に竹深く刺し地鎮祭  
料峭や浜に藻屑を焚きし跡  
きざむほど山の香放つ露のたう  
書出しにつまづく手紙花貝母  
蓮如忌の仏に供ふ五目飯

金沢 高田たみ子

よくのびるいちご大福うらけし  
夕桜旅の土産のバター菓子  
白鳥の小屋は空つぽ初桜  
熊よけの鈴をひびかせ花の山  
観覧者はるかに望み麦青む

金沢 豊田高子

水底に日の翳曳ける石斑魚かな  
下戸上戸酌みて校歌や花筵  
春暁や法螺の音わたる吉野山  
薄目してみどり児ねむる花の昼  
鳥交る千の小枝を弾ませて

金沢 松井佐枝子

蠶や海へ入り日のやはらかく

三叉路の火除け地藏へ桜東風  
城垣の苔の青さよつくづくし  
魯山人寓居の初音畏り  
黄水仙声先んずる児らの列

金沢 石川 純 子

春満月忍び足なる猫の影  
町筋に風新しく初つばめ  
銭湯の煙真つ直ぐ花の昼  
囀や弁財天の遠まなざし  
眼前に殿様蛙かしこまる

金沢 河野 尚 子

コサージュを胸に一人の卒業式  
雲よりも加賀富士白し春遅々と  
山裾の竹の擦れ合ふ余寒かな  
朝のスープ浮かす石蓐のひすい色  
湿原に小さき瀬音水芭蕉

金沢 道場 啓 子

春深し川面に揺らぐネオン街  
変はることなく桜咲く地震の地に  
師の句碑の地震に向き変へ鳥帰る

春田打つ珠洲の海風袖口に  
家苞に択む増穂のさくら貝

金沢 杉本 年 虹

頭陀袋は和蘭更紗梅香る  
さまざま千代尼の印や牡丹の芽  
川風に消ゆるらふそく彼岸寺  
蠶ぐもり大路を廻る街宣車  
度忘れも忘れ終日うらけし

金沢 南 恵 子

香箱は手の爪ほどや雛調度  
仏飯に赤飯盛られ桜どき  
芽吹きたるななかまど売る近江町  
野仏に手を合す子や蝶の昼  
遅き日や塀の三毛猫器量よし

金沢 松下 信 子

喫茶店混みゐて静か花ミモザ  
木の洞を出入りの雀うらけし  
ランドセル駆け出す野道風光る  
白木蓮鏤もて散れる日暮かな  
地藏堂のほとり嵩なす春落葉

金沢 北川 禮子

小さき靴数多並べる涅槃寺  
三椶の花を戸口に和紙の里  
白山を映す渴の辺蘆の角  
ブレハブの産土神や梅香る  
ライダーの長き黒髪春の風

金沢 清水英理子

うぐひすを真似て口笛峠道  
七色の風船放ち閉校す  
自転車サドルを高く木の芽風  
なつかしき唱歌つと出るつくづくし  
牛乳を飲み干す四人花万朶

内灘 塩井 志津

所得て咲き継ぐ椿半世紀  
おもむろに亀の首出る日永かな  
下校児と挨拶交す木の芽道  
夕映えや残雪の峰玲瓏と  
のどけしや竿竹売りの声太く

七尾 谷渡 末枝

海紺にのと鉄道を花吹雪

箴音のうるむ蛙の目借り時  
水を揉み堰に数なす落椿  
穴出づる蛇草の香に身を塗し  
祈り解く白木蓮の散華かな  
春陰や牛の胎盤手で濡ひ

白山 加藤美栄子

木の根明くあした嫁ぐと機織女  
棟上げの槌音高く草青む  
伐採にひねもす見入る孕み鹿  
桃色の帯やかざしや花衣  
鶯の初音を待ちぬにぎり飯

敦賀 倉谷ます美

久々の天つ日を吸ひいぬふぐり  
流し雛紙舟波にもまれゆく  
苗木市菰こんもりと根を包み  
春うれひ夫の言語の抜け落ちぬ  
ぎしぎしや炭焼跡の片崩れ

敦賀 鶴田 勝子

一の堰二の堰しのぎ流し雛  
海女の墓海に傾ぎていぬふぐり

大海の波の穂かすめ燕来る  
春愁や妣に詫びたきこと多く  
ぎしぎしや丸太二本の橋越えて

敦賀 中川 雅月

苗木売りのハンチング帽後ろ前  
鳥帰る声 暖れて一千羽  
草叢に星のまたたき犬ふぐり  
花ミモザ一度に咲きて空真青  
門前の小川の流れ水温む

敦賀 中村 優

春愁や街路樹の根に煉瓦浮く  
九重の供養塔あり甘茶仏  
直売の野菜苗買ふみどりの日  
新主将マウンド均す弥生かな  
寄居虫の小貝に紛れ茹であがる

敦賀 為永 香月枝

レガシーとなりし良太師入彼岸  
鳥声に誘はれのぞく苗木市  
佐保姫や恐竜像の目覚めゆく  
舟小屋の暗きに遊ぶ遊糸かな

遠廻りしてからももの花の下

徳島 福島 吉美

竹鉄砲玉は紫紺の竜の玉  
丸干しの針魚の揺るる伊根の宿  
異国去る長き握手や春の駅  
水餃子韭の緑が透けて見ゆ  
こふのと住みつく里や蓮植うる

徳島 村上 和義

小流れにゆつくり結ぶ花筏  
臘夜の青のマスクの占ひ師  
清流へどつと投げ込む鮎の稚魚  
有明の海の砂吐く浅蜷かな  
貝塚へ曲がる山裾著莪の花  
出征の島にマリア蔓延れり

徳島 宮西 修一

匂ひ立つ味噌のかをりの蜆汁  
犬にお手教ふる夢や四月馬鹿  
縁側に伸びて縮んで春の猫  
道路鏡よりはみ出して春の雲  
入学すサインコサインタンジェント

徳島 平岡 功

二月堂火の粉に混じる春の雪  
駄菓子屋に小さき土鈴の内裏雛  
不揃ひの草餅並ぶ母恋し  
影絵めく夕日の中の徒遍路  
縄電車走る沿線葱坊主

石井 木内 マヤ

モンローのポストカードや花の昼  
烏賊刺しの皿に透けたり花の冷え  
酔ふ父と酔はざる娘花見酒  
白木蓮飛び立つ準備咲く準備  
老松を見上げて吾子の入学す

小松島 岡田 あゆみ

「ヤッ」「ハッ」と能の掛け声山笑ふ  
鰻屋の竹の騒ぎや春一番  
島ちゆうにまんまるの石あたたかし  
ジーパンの小さきポケット青き踏む  
本を読む私の時間木の芽風

長崎 丸本 祥夫

石たたき確めながら恵方道

城垣の隙より啼けり雀の子  
種浅蜷大きく撒けり三番瀬  
校正の赤ペン入れて桜餅  
軽やかに袴のブーツ卒業生

西海 山下 敦子

網繕ひ習ひし屋根に花の雨  
うららかや小さき花に小さき虫  
蜥蜴出で光りつ消ゆる草の中  
桎の花轍を埋めなほ余り  
着替ふれば山椒の芽のかをりたる

宮崎 中山 宣

地虫出づ年中さんの語彙豊か  
耳鼻科医の首捻りたり花曇  
花銀杏<sup>流鏑馬</sup>りりしき馬上姿かな  
夕さりの光射したる門桜  
惜別の母の涙や風光る

宮崎 中山 芳教

薩州の山青あをと雁帰る  
旅立ちの荷の紐十字鳥曇  
垣越しの昼餉や目刺焼く匂

尾根伝ふ薩摩街道山桜  
教会の十字の窓へ春嵐

宮崎 鳥居達史

鎮守森映し春田の輝けり  
破れ鉢を抱き根をはる春の草  
群れ鴨の引きて老農点となる  
医者通ひの車窓にまぶし新樹光  
晩学の一句思ほゆ柿若葉

那覇 中本清

鳥帰る島に一基の亀甲墓  
熱うせよ漁夫が仕立ての石蓴汁  
煮魚の目玉をしやぶる春の昼  
午後からの風は海より青パパヤ  
春驟雨蚤五十戸にいくたびも

西原 宮城勉

若芝の子らは風の子光の子  
春宵の雲のとき色星生まる  
いちまいの朧の底にちまたの灯  
蠶ぐもり戦後の色に街暮るる  
行く春の風に従ふ白帆かな

うりずんや海草あをむ潮だまり

豊見城 渡真利真澄

糸繰りの音にねむたし春の昼  
糸杵に色の殖えゆく日永かな  
清明や川原にはづむ雀どち  
仔をくはへ猫の家移り桜実  
耕人の山の湿りをまとひけり

ペリシ 鈴木波江

父が靴脱げば子もぬぎ青き踏む  
玉露より始まる試飲花の窓  
日永かな熱き豆乳搾りゐて  
夫の木に青蔦高くとかく伸ぶ  
小流れへ踏みつつ下るたんばは野

## 万象基金のご報告

匿名 一五〇

(令和7年5月1日〜6月5日・受付)  
「万象」の発展のため、大切に使用させていただきます。

万象俳句会

# 同人作品の佳句

江見悦子選

馬の背に日の矢飛び来る厩出し  
 ちよつとこい裾廻に對の道祖神  
 森森の代田に利根川の匂かな  
 国境てふ不確かなもの黄砂降る  
 囀や谷の底まで異人墓  
 大江の忌過ぎ大樟の春落葉  
 青饅に亡き師の一句偲ばるる  
 カーテンを割り春月に溺れたる  
 師逝くやときに激しき菜種梅雨  
 シューシューとエクモの呼吸春の闇  
 師の句碑の地震に向き変へ鳥帰る  
 箴音のうるむ蛙の目借り時  
 出征の島にマラリア蔓延れり  
 午後からの風は海より青パパヤ  
 いちまいの朧の底にちまたの灯

大内マキ子  
 大木 茂  
 三屋英俊  
 横川良子  
 久留島規子  
 喜多尾明子  
 大村峰子  
 荻野加壽子  
 小川明美  
 成瀬真紀子  
 道場啓子  
 谷渡末枝  
 村上和義  
 中本 清  
 宮城 勉

同人会だより

富士市と葛飾北斎の富嶽三十六景

神田美穂子

「富嶽三十六景」は江戸時代後期の浮世絵師葛飾北斎の手になる名所木版画集の一つで、北斎の代表作である。そのうちの「駿州片倉茶園ノ不二」「駿州大野新田」「東海道江尻田子の浦略図」の三枚は富士市の風景を描いたとされている。

「駿州片倉茶園ノ不二」は大規模な茶園で忙しく働く様子が描かれている。女達は茶摘みをし、男達は茶葉を籠に積み込み、馬で作業場へ運び右手の建物に集めている。背後の富士山は雪を被っていて初夏の茶摘み風景とみられる。

「駿州大野新田」は富士市の南東部に広がる浮島が原と呼ばれている湿地帯の西側に位置する。明治初期までこの辺りは大小の沼が点在しており、これらを総称して浮島沼と呼んでいた。かつては富士講の信徒の行う富士八海めぐりの聖地のひとつであった。又この浮島沼の南には旧東海道が通り、歌川広重をはじめとする浮世絵師によって、富士山を背景とした浮島沼風景画が様様に描かれている。

「東海道江尻田子の浦略図」の田子の浦は、奈良時代の万葉の歌人山部赤人の「田子の浦ゆちいでてみればま白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」でも知られる歌枕の地である。この絵は二艘の船が波に揺られ、漕ぎ手達は渾身の力を込めて櫓を握っている。浜では人々が田子の浦名物の「塩焼き」を楽しんでいる。船の弧線が富士の弧線と響き合うように描かれている。近年「凱風快晴」も富士川の河川敷からの景色という説が出ているようだ。

5月の「万象」オンライン同人句会高地点

|   |                 |             |
|---|-----------------|-------------|
| 8 | 万緑や宇宙の数式黒板に     | 喜多尾明子(日野)   |
| 6 | うんていを一つ飛ばしに五月来る | 宮西 修一(徳島)   |
| 6 | 黒鯛跳ねて魚拓の和紙に墨が飛ぶ | 竹澤 竹里(千葉)   |
| 5 | 父が靴脱げば子もぬぎ青き踏む  | 鈴木 波江(ベルリン) |
| 5 | てんと虫背に露ほどの日の光   | 中鉢 弘一(札幌)   |
| 5 | 手術待つ夫へ急げり余花の雨   | 山本とく江(柏)    |
| 5 | 巻きひげを頼みに風のスイトピー | 赤堀 洋子(船橋)   |
| 4 | 母の日やチラシの裏に母の文字  | 塗木 翠雲(四街道)  |
| 4 | 屋敷墓の一基はクルス竹落葉   | 茂木 弘子(加須)   |
| 4 | 昭和の日ウルトラマンは風呂敷で | 名和 政代(東京)   |
| 4 | 田水張る一縷の水も余さず    | 塗木 翠雲(四街道)  |
| 4 | すれ違ふ電車の軋み修司の忌   | 荻野加壽子(静岡)   |
| 3 | 惜春の夜の来てゐる地下茶房   | 桑原優美子(東京)   |
| 3 | 蛇穴を出で停めたるは新幹線   | 丸本 祥夫(長崎)   |
| 3 | 臘夜の風の重たくなりけり    | 荻野加壽子(静岡)   |
| 3 | 日のなかに新樹さわさわ日を返し | 加賀 葉子(東京)   |
| 3 | 火球吹くガラス工房緑さす    | 大木 茂(足利)    |
| 3 | 流されず流れ変へゆく落椿    | 穂苅 照子(流山)   |
| 3 | 筆触るる檸檬の受粉夏めきぬ   | 加賀 葉子(東京)   |
| 3 | 葉桜の中夕月のレモン色     | 佐藤 和子(伊勢原)  |
| 3 | 武者幟与一の弓の定まらず    | 三屋 英俊(佐倉)   |

(\*句頭の数字は点数を示しています)



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に「心」を含む漢字を入れてみましょう。

- |    |                  |       |
|----|------------------|-------|
| 1  | □ ひつ、岡にのほれば花いばら  | 与謝蕪村  |
| 2  | おもしろうてやがて□しき鶴舟哉  | 松尾芭蕉  |
| 3  | 鞆轡は漕ぐべし□は奪ふべし    | 三橋鷹女  |
| 4  | ふだん着でふだんの□桃の花    | 細見綾子  |
| 5  | 羅や人□します□をして      | 鈴木真砂女 |
| 6  | □力のゆるめば死ぬる大暑かな   | 村上鬼城  |
| 7  | □ぐ蟻□がぬ蟻の前よぎる     | 内海良太  |
| 8  | 利休□や縁美しき京畳       | 鷹羽狩行  |
| 9  | 万□節半日あまし三鬼逝く     | 石田波郷  |
| 10 | 庭下駄に雫落しぬ釣□       | 日野草城  |
| 11 | 隠岐やいま木の芽をかこむ□濤かな | 加藤楸邨  |
| 12 | 穴□ひ天神様の細道に       | 飛高隆夫  |

【正解】

- |   |     |    |   |    |     |    |   |
|---|-----|----|---|----|-----|----|---|
| 1 | 愁   | 2  | 悲 | 3  | 愛   | 4  | 心 |
| 5 | 悲・恋 | 6  | 念 | 7  | 急・急 | 8  | 忌 |
| 9 | 愚   | 10 | 忍 | 11 | 怒   | 12 | 惑 |

おいしい俳句

第5回 嵐山光三郎

とろろ播る淡雪よりも白く播る 鈴木真砂女

真砂女は東京銀座の横丁で居酒屋「卯波」を経営していた。この店で出す和風焼売がセクシーな味で、安西水丸と一緒に何度も出かけた。真砂女は鴨川のお茶屋の三女だから料理もプロ。波乱万丈の生涯は瀬戸内寂聴の小説『いよ華やぐ』となりテレビドラマになった。

とろろ汁はヤマイモを搾り、ダシ汁を加えた料理で日本酒にあう。イモの皮をむいて、播鉢のなかでゴリゴリと搾る。夕暮れの店の外は淡雪。降るそばから消えていく春の雪である。心がはずんで、外の淡雪と一体化していく。

この句は昭和五十九年作、『居待月』に所収されているが、『都鳥』で「死ぬことを忘れてをりし心太」(平成四年作)と、ところてんをけなしている。ところてんの薄い濁りに死を予知し、食べ物に対する本能的直感が示された。私は故郷の夏祭で売っているテキ屋のところてんが大好きだったが、この句によって、怖れるようになった。「おいしい」食べ物には裏があるのです。

『夏帯』に「白桃に人刺すごとく刃を入れて」。桃をむくには、人によっていろいろな流儀があるが「人刺すごとく」は真砂女の狂気が感じられる。おいしい句には裏がある。

## 佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞（五月号）

沢辺 たけし

吾に遠き春風となり逝かれしか 岡本敬子

春立てば復帰と皆の願うたに 奥太雅

如月や二度とは聞けぬ良太節 塗木翠雲

春待ちて春待ち切れず逝かれけり 山本とく江

豆打てば口衝いて出る良太の句 久留島規子

寒昂ぢやあお先にと逝かれけり 久留島規子

師の逝ける浅草の空春の色 新妻奎子

天国は花の郷ぞや良太さん 宮城勉

前掲の8句は、前書に内海良太名譽主宰の名を記した追悼句である。先月の「同人作品」には、この他にも前書のない追悼句が沢山あり、合わせるに30句以上となる。その数から多くの方々にも慕われていたことが分かる。

追悼句とは、故人を偲び、また悼み、悲しみを詠うものであり、作者の思いがストレートに伝わってくることは勿論だが、良太先生との関係性さえも伝わってくるように思える。

きさらぎと言ふくちびるのあどけなき 岡本敬子

「くちびる」というと（物言へば唇寒し秋の風 芭蕉）

の句を思い出すが、この句は唇のあどけなさを詠んでいる。

「きさらぎ」は確かにア音とイ音だけ、ウ音とオ音がないた

め発音すると唇の形はさほど変化しないので、作者はその唇の動きをみて「あどけなき」を感じたのだろう。句としては季節感が弱いのだが、よく見ているからこそ出来た句であり、しっかりと見ることが俳句では大事である。

鍊群来海猫待つ浜の白濁り 中鉢弘一

昔は大漁だった鍊。鍊御殿の話は有名だが、たとえ句の中でも「鍊群来」の季語をみると嬉しくなる。「海猫待つ」とあるが、鍊を待っているのは人間だけではない。海猫も群れを成して待っているのである。海猫の体の白と翼の灰色が入り交じり、遠目には「浜の白濁り」と映ったのだろう。

仏壇へ飛び込んでゐし年の豆 高橋ひろ

節分の翌日の景か。仏壇に逃げ込んだお父さん鬼を子供が追って来て豆を投げたのだろう。その豆がぼつと一粒「仏壇」の隅にあった。普段は綺麗に整っている仏壇だからこそ、「年の豆」の存在が絵としても面白く感じられる。

存へて吾なほ半寿深雪晴 高野松風

「半寿」とは81歳のこと。この句の「なほ」は読み手によって受けるニュアンスは変わるかもしれないが、作者は感慨を持って「半寿」と言っている。そして取合わせた季語は「深雪晴」、この季語は今までの人生に對してか、これからの人生に對してか、それとも現在なのか、いずれにしてもその心境を真つ青な空と真つ白な雪原が表している。

寒明けを言ひし言葉の弾みをり 加藤季代

寒明けと立春は同じ日だが、この句は「寒明け」を使っている。言葉として、立春はこれから春になる喜びを表し、寒

明けは今までの寒さがなくなる嬉しさを表しているように思える。句としては、二つのア音を持つ「寒明け」という言葉を使ったことによりリズムが良くなり「言葉の弾みをり」が生きてきた。

寅さんの旅立ちの像 風光る 大木 茂

東京は葛飾の柴又駅前広場にあるフーテンの寅像はちょっと後ろを振り返っているが、その眼の先には見送りに来た妹さくらの像が立っている。「寅さん」の旅立つ理由は言わずもがな。実際の寅さん像を見た人は判ると思うが、「寅さん」の表情はよく見るとやるせなく少し淋しげである。だからこそ季語の「風光る」が救いとなって寅さんの明るい未来をも予感させてくれる。

地下鉄に風の階段 余寒なほ 大月 玲子

都心の地下鉄は新しい路線ほど地中深くなり階段やエスカレーターはそれにつれて長くなっている。地下鉄を降りて階段を上って行くと地上口から風が吹いてくる。春になってもその風が冷たく感じられるというのは多くの方が経験しているのではないか。この句、「風の階段」と言い切ったところが良い、「余寒なほ」と響き合っている。

梅 真白門 固き武家屋敷 横川 良子

室町時代、梅干は食品ではなく薬だったが、戦国時代には携帯する糧食の一つとなった。また、藩主が実の成る木を庭に植えるのを奨励したという話もよく聞く。こういう経緯もあって武家屋敷には梅の木がよくあるのだらう。

この句、真っ白い梅の花と武家屋敷を詠んでいるが、中七

の「門固き」が句を確かなものしており、漢字が多いのも句に似合っている。

吊られたる猪の眼に野の光 下 嶽 孝一

捕獲された猪が肢を縛られて背中を地面に向け棒に吊るされている姿が目につく。力なく開かれていた黒い眼には周りの景が映っているのだが、作者は野を走っている猪の姿を脳裏に思いうかべたのかも知れない。その眼に「野の光」を見た。

後ろ手にバレンタインの日 桑原 優美子

「バレンタインの日」は聖バレンタインが殉教した日。日本では女性から愛をうちあけることが出来る日となっている。この句の「小箱」を持っている人は勿論女性、相手の男性にプレゼントを渡す直前の姿を詠んでいる。2月14日にあった出来事の一瞬をとらえた楽しく可愛らしい句。

獵小屋に血糊黝ぐる 獵期果つ 豊田 高子

俳句は自分の琴線に触れたものを表現するので、詠む対象は美しい景や物事に限らない。この句の「獵小屋」では捕殺した獲物を一時的に保管したり、時には捌いたりすることもあるのだらう。「血糊黝ぐる」という表現に臨場感があり、人間の持つある一面を描いている。

頬紅ほど雪嶺染むる 落暉かな 松井 佐枝子

「雪嶺」と云うと遠景を思い浮かべるせいか、雪山の厳しさより美しさが見えてくる。この句はその雪嶺を「落暉」が「頬紅」の色に染めて更に美しくなった景を描いている。例えに頬紅を持ってきたのが面白い。句として綺麗すぎるのかもしれないが、美しい景は美しいまま詠みたい。

## 私のこの一句

一病を僧に誉められ鴨足草 吉中愛子

我が街の田園風景は、癒しに適ったほどよき田舎である。予定のない日には街の外郭を1時間ほどかけてウォーキングを楽しむ。一周の道には神社仏閣が5か所。子供のころからの習慣でお参りすることは私にとっては自然体であった。

菩提寺でもある高蔵寺には特別な思いでお参りする。ある時ご住職に「元氣ですね」と声を掛けられ「いいえ喘息持ちです」と応えたと「それは良かった。病む人の氣持になれるから」と誉められた。お参りは良い時も悪しき時も晴れ晴れする。鴨足草の小さな白い花に思わず感謝した

松蟬や遥か足尾の裸山 亀田やす子

昨年5月末、奥日光湯元温泉に出掛けた。九輪草の群生が其処此処に見頃であった。硫黄の香を噴く源泉小屋の木道を巡ると藁が鳴き、近くに鹿の親子や猿の親子も現れた。

翌日、中禅寺湖の歌ヶ浜を通り、半月峠へ車を走らせた。暫く登ると半月山展望台の広場に到着。見下ろす新緑の美しさに感動した。すると下方から松蟬の響きが耳に飛び込んできた。

遠く足尾の山並は新緑であったが、更に奥の松木溪谷の山

は地肌を見せ裸の山である。足尾銅山の煙害で、今なお木々を失ったままの痛ましい姿に不満を覚えるのであった。

冬浪のかなたまたたくロシアの灯 岡本敬子

沢木欣一先生が巻頭にしてくださった句。TVニュースの現場にいた20代の頃、根室の納沙布岬に近い貝殻島周辺では、昆布漁船がソ連（当時）によって拿捕される事が続き、編集室に緊迫した画面が飛び交っていた。日本人が開いた菌舞・色丹・国後・択捉は、戦後不法占拠され、2万人近くが島を追われた。時が流れ、60代に稚内からサハリンを見た時にこの句が生まれた。大坪景章先生は、この句に政治的意図はあるのかと尋ねられ、私は素朴なものと答えた。島に国境は無く、人にはどれだけの土地が要るのかといったような……と。

富士の風翼に燕巢立ちけり 神田美穂子

富士宮市の市制施行80周年記念「富士山を詠む」俳句賞の佳作（選者特選）に入った句。2年程前に道路を隔てて北側に2階建ての保育園が建ち自宅から富士山は見えなくなってしまうが、玄関を出て20歩程歩けば見える。私にとって富士山は日常。日々表情を変える富士山は貴重な句材の一つ。夕方4000歩を目標に毎日歩いているが、その日その日の富士山の顔がある。間もなく燕の巣立ちの季節、今年は燕とどのような出会いがあるだろうか。近隣の宅地開発が進み茶畑は減る一方。夕映えに耀う新芽の揃った茶畑と富士山も美しい。

# 北から南から

## 神奈川県支部吟行句会

川崎 新妻奎子

「雨だ。それもざんざん降り！」令和7年3月28日の朝のこと。「俳人に悪日無し」とは言うものの、吟行会の当日の雨に、主宰・編集長はじめ24人をお迎えする神奈川県支部の世話役としては、心が痛んだ。

しかし9時過ぎから徐々に雨脚が弱まり、11時頃には晴れあがってきた。主宰は「神奈川晴れ」と表現して下さった。

元町・港の見える丘公園・中華街・山下公園などを吟行して、午後1時半、神奈川労働プラザに於いて開会の運びとなった。司会は大久保進さん。先ず柳澤宗正支部長より、「神奈川県支部の吟行句会は実に7年ぶり」と挨拶。次いで主宰・編集長の挨拶をいただき、句会へと進んだ。披露は星野信子さん・三木豊子さん・佐藤和子さんの3人。

### 江見悦子主宰 選

昨夜の雨開き切つたるアネモネに 佐藤和子  
釣宿の外の流し場春蚊出づ 西本才子  
蠶や皆海を向く異人墓碑 恒川清爾  
吟行の弁当青菜のにぎりめし 藤田裕子  
紋白蝶クルスの墓を一巡り 久保田富士子  
(特) 鴉二羽巣組の生木ちぎりをり 柳澤宗正

### 中村千久編集長 選

ひたひたと寄せ来る汐や鳥曇 三木豊子  
手相見の朱紅の街や春愁 三宅芳枝

雨あがるイタリア山に初蝶来 藤田裕子  
紫の長き線香籠天に 三宅芳枝  
外人墓地クルスの墓に姫椿 三木豊子  
(特) 桜まじはためく国際信号旗 江見悦子

### 吉中愛子 選

アネモネの白ばかりなり海の青 山本カッ子  
春風やベイブリッジに背伸びする 大駒泰子  
アネモネの真白き二輪氷川丸 鷹取瑞子  
(特) すれ違ふピカソの顔の春コート 江見悦子

### 柳澤宗正 選

花の雨蜂の重さにひとしづく 一由久美子  
花冷えの人に疲れてジャスミン茶 大久保進  
海に向くベンチ満席うらけし 新妻奎子  
(特) 朝ざくらスタンドグラスの青ふかむ 榎本文代

### 高点句

八角のにはふ路地から春の猫 中村千久  
噂や谷の底まで異人墓 久留島規子  
燕くる元町裏の河岸通り 榎本文代

特選句にはそれぞれの選者から染筆が贈呈され、榎本文代副支部長より皆様への感謝の言葉で閉会となった。続く有志による懇親会は大いに盛り上がり、俳句談議に花を咲かせた。

## 子規と私 (六)

細見綾子

早稲田の先生で佐藤和夫さんという、日本の俳句の翻訳ばかりをしている人の『菜の花は移植できるか』という本が出ています。菜の花は移植できるか、菜の花を外国へ持って行っても花は咲くだろうけども、真の菜の花っていうものは移植できないという本ですね。それと同じような考えで、私は外国では俳句は育たないんじゃないだろうかと、そう言いました。それをどういうふうに伝えたか知りませんが、外国人は、何か日本的なものに対して魅力を持つんですね。

でも、日本的なものの魅力、お能とか俳句には限らないけど、そういうものの魅力は日本的であればこそその魅力ですね。

俳句にも新興俳句とかいうものがあるけれど、私、新興俳句は反対です。あんな季語の入らない俳句、季語が入ってこそ俳句なんであって、ただ五・七・五で、季語が入らないものは俳句じゃないから、そういうものは外国人だって魅力を感じないだろうと、私は思うんです。

私は何が一番俳句の特徴かと言ったら、やはり日本の風土―大変やさしいことを言いますけど、俳句は日本の風土に育つものである。これが、まず一番の特徴だろうと思うんです。

たとえば、私がきょう来る道でも、空港に芒がはや穂を出していて、本当にいいなあと思うんですけど、日

本人じゃない人は、その芒をいいなあなんて思う人はほとんどいません。そういうところに、風土の俳句があつて、風土を外にしたものは、私は俳句じゃないと思う。

日本の風土っていうものは、ただそこにあるから風土なんじゃなくて、私たちが万葉集の昔から、源氏物語の昔から、大変な日本人のエネルギー、いちいち挙げられないけれども、たくさんさんの文学作品があることによって、日本の風土が磨かれてきたんです。一朝一夕のものじゃなくて、私たちの見ている現代の風土も、そういう伝承の上にあるので、それがなくちゃ日本の風土の美しさなんかないと思います。

そこで、俳句を作っていくことのほかに、そういう伝承についての思いを深くして欲しい。風土の美しさ、日本の美について山本健吉さんも書いていましたけど、たくさんの方が作品を作ることによって風土を磨いてきたと思うんです。それが一番日本の遺産というか、一番日本のいいものじゃないかなあとすら考えています。それをここで捨てたりしないで、何とか先へ繋いでいきたい、続いていきたい。ただ一人の立派な俳人、作家が出るよりも、たくさんの方が出て、いまなら野の花を詠み、春は桜の花を歌い、そういう精神の土壌、そういうものが伝わっていくことこそ、本当の本懐じゃないかなあ、と思います。たとえば、万葉集の歌なんて、名のある人は本当に少ない。名もなき詠み人知らずの歌が多い。あれでもいい。日本の美というのはそういう人がつくってきたんです。それが大事なんじゃないかなと思うんです。

## 『万葉集』にたずねる抒情の源流 ②

橋本 清

陸奥の 真野の草原

遠けども 面影にして 見ゆといふものを

(三・三九六)

「陸奥の真野の草原。遠く離れているけれど、(その気になれば)目の前に浮かんで見えると申しますよ。」

笠女郎

(伝未詳) が大伴家持に贈った三首の歌の第二首。

この巻では警喻歌に分類されています。警喻歌は相聞の一体で、主に恋情を、おおむね隠喻によって訴えた歌。作者は家持に深く思いを寄せていた女性で、次の巻四には家持に贈った二十四首もの情熱的な相聞の歌が載っています(五八七―六一〇)。

この歌は全体が隠喻になっているようです。したがって、どんなことを比喩しているかについては様々な解釈が可能でしょう。ただ一つ言えることは、当時の都人にとつて陸奥は、まるで遠い異国のような感じがしただろうということです。そうすると、「遠けども面影にして見ゆ」は、そんなに遠く離れた土地に惹かれる、一首の憧れに似た思いを述べており、相手の家持の心をそちらに誘い、ロマンチックな気分を呼び覚まそうとしたのではないかということです。

森鷗外の小説「舞姫」(明治三年)の主人公・太田豊太郎は、官命によってベルリンに留学して来た青年です。国

と家の期待を胸に、「あだなる美観に心をば動かさじ」と堅く心に誓い、「つねに我を襲ふ外物を遮り留め」ていました。ところが、偶然出逢ったエリスという、場末の劇場の踊り子に心を奪われてしまった。それは、散歩からの帰路、三百年前の古寺(教会)の遺跡を望んで、「心の恍惚となりて」、しばし佇んでいた時のことでした。

今この処を過ぎんとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、声を吞みつつ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六七なるべし。被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我足音に驚かされてかへりみたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この背く清らにて物問ひたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる睫毛に掩はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我心の底までは徹したるか。

三百年前の教会のたたずまいに見とれ、遠い昔に思いを馳せていると、学業の妨げになるような魅力的な外物には一切心を動かすまいとする日頃の警戒心もいつの間にか弛んでいたのです。そんな時、この運命的な出逢いがあった。人は時間的に、あるいは空間的に遠く離れたものに心を惹かれることがあります。そんな時は外物を寄せつけまいとする頑な心もついほぐれる。笠女郎が「陸奥の真野の草原」と歌い起こした時、家持の心も自ずとそちらに誘われたことでしょう。そうやってロマンチックなエモーションを喚起することで、頑な相手の心を解きほぐそうとしたのではないか。

(以下、次号)



# 万象ノオト



テーマ『コップ』

## コップ酒

静岡 杉田義則

コップというと、屋台のコップ酒を思い浮かべます。受け皿にあふれ出た酒の量に一喜一憂した経験をお持ちの方も多いことと思います。

私は、この一年の間に二人の親しい先輩を見送ることになりました。

岩崎武士先生（「万象」同人）と曾根満同人会会長のお二人です。

岩崎先生は日本酒を愛し、何故かいつもコップ酒でした。飲んでも飲まれることなくきれいなお酒でした。

曾根先生と親しくなったのは、退職後でした。三年前に「万象」に誘われ、初めて句会なるものに参加しました。

先生は、会場で借りたコップでお湯

割りを作り、ちびりちびりやりながら、やがて毒舌全開となります。この野郎と思うこともありましたが、楽しい酒でした。お二人のご冥福を。 合掌

## 水の入ったコップ

酒々井 小林あけみ

水の入った透明なコップの後ろに、いろんなものを置いて眺めてみる。苺やしめじ、フォークや泡立て器—なにか別なものが現れる。金魚の入った水槽を置いてみると金魚の顔が……。

（絵本「まほうのコップ」より）

コップは虫を捕まえる、虹も作れる、歌も歌える—見方を変えると色々なことが見えて来ます。

（絵本「こっぽ」より）

コップは世界中に包まれていて自分も自分を包んでいて、自分を包む世界を自分もまた包んでいる。

（コップ「まどみちお」より）

コップになりきった壮大な世界は最後の三行でまどさんの人としての佇まい、在り方が感じられます。

（「まどさん100歳100詩集」

まどみちお詩の本」より）

そういえば、我が家では幾つかのコップでアボカドが育っています。

## コップの寿命

静岡 矢野喜久江

コップとは、飲料を入れるための、円筒形の容器です。「kopp」というオランダ語に由来します。

つい最近、食器棚の奥に紫のコップを見つけました。分厚くて重く、水を飲むのに不便なので使わずにしまっていました。その紫のコップは廃棄しました。

次は透明のコップ。10センチほどのコップで重宝しておりました。それなのに指がばね指になり、物を掴む力が弱くなり、気をつけているはずなのに、次々とテーブルの下に落ち粉々になりました。

今は、透明のコップ、長さは12センチ、レモンの絵柄のコップを使っています。

日常にいつもあるコップ。何時迄も気をつけて使い続けたいと思います。

## ブランデーグラスの思い出

大阪 入山繁幸

食器棚の奥にあるブランデーグラスは友人から結婚祝いに頂いたものだ。ボヘミアンカットのグラスは、掌にしっくりとその丸みが乗り、手の温もりからブランデーの芳醇な香りが漂い、私はその香りも楽しんだものだ。

結婚当初は、そんなグラスでナイトキャップを楽しむことも出来たが、終ぞ戸棚の奥に鎮座してしまっただの。

私の兄も生前は、自宅のソファアに身を沈めながら、葉巻を燻らせ、ブランデーをこよなく愛した。

いつぞや兄に言った。「白黒キネマの世界だね」と。このグラスを見て、そんな兄を思い出した。

## 無の用

調布 荒井 仁

コップの歴史は古く、古代メソポタミアでは様々な目的で製作され、酒の運搬や飲用などに用いられた。『老子』に次のような記述がある。「埴を挺ねて以て器を為る。其の無に当たり

て、器の用あり。」

先日、無の用について授業をしたら、ある女生徒が無は欲の源、知識の詰め込みは生のダイナミズムを損なうと言った。たかが漢文で生きる希望をなくされても困るから、「君、食欲はあるだろう、腹が満ちてもじきに減る。知識も同じだ」と言ったら、「試験が悪くても大目に見るのですね」と笑った。昨今、インスタや「推し」への課金で心の隙間を埋めようとする若者があ

る。あはれとはワイングラスの蜚鳥賊

(加藤正尚『童顔』)

私たちは子どもたちを、無自覚にグラスに盛り付けてはいないだろうか。

## 小樽切子、コップの進化史

札幌 佐々木 茂

電子辞書の「広辞苑」で、コップと引くと、【kop (オランダ)・洋盃・骨盃】ガラス製の飲み物用の容器。カップ。和蘭問答(1724年)「―と申す水器の盃」とあった。

以下もネットからの引用であるが、ガラス工業の盛んな地域の一例として

北海道小樽市を挙げています。

明治から大正にかけて、小樽とその周辺の日本海岸は鯨漁の最盛期であった。その漁には網を浮かすガラス製の浮き玉が必要され、小樽のガラス工場は全盛を誇った。だが、時は移り、鯨は北へ去り、戦争の昭和時代となる。ガラス工業は工芸化の度を進め、単なるガラス製品ではなく、線刻などを施し、価値を高めた小樽切子売り出している。コップの進化を辿ってみた。



## 「万象ノオト」投稿募集

▽11月号「薬」(7月末日締切)

▽12月号「駅」(8月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

## 巻頭作家（六月号）プロフィール



井端久子  
(金沢)

いたことを思い出す。

平成6年珠洲市民文学賞受賞。

「風」終刊後、平成16年創刊千田一路主宰の「風港」に入会する。

平成17年「風港」同人となる。

平成28年「風港俳句賞」受賞。

令和元年「犀星俳句文学賞」受賞。

井端久子さんは、石川県かほく市生まれ。珠洲市で開業医をされていたご主人と結婚され、ずっと珠洲市に住まわれていたが、昨年元旦の能登半島地震で自宅は全壊となり、現在は金沢市の子供さんの近くに暮している。

4人のお子様にも恵まれ専業主婦をされていた。子育てが一段落して自分の楽しむ時間を持ちたいと思っていた頃、地元の公民館の句会に誘われた。それが「風」の千田一路先生指導の句会だった。「風」に入会したのは平成3年。「風」全国大会では、いつも千田先生を先頭に珠洲の人達は熱心に参加され、その中には常に井端さんが出席されて

地震により「風港」は昨年3月で終刊となり、俳句を続けたいと思っていた井端さんは、先の見えない日々のなか、中條睦子さんより暖かく、心のこもったお言葉で「万象」へのお誘いを受ける。「風港」同人として長い経験と実力を持ちながら、ゼロから会員として入会することを強く希望された。何事にも謙虚な井端さんである。地震後、角川の「俳句」へはほぼ毎月投句され毎月良い成績で入選されている。墓洗ふ地震にずれたるまま洗ふ掲句は森田純一郎先生の特選に選ばれている。

俳人協会「第63回全国俳句大会」では多くの応募作品の中から次の4句が入選となる。素晴らしい成績である。

倒壊の伽藍を高く帰る雁  
救援のへり冬虹を抜け来たる  
箱型の家建並ぶ秋の暮  
冬蜂の蕊にまると身を埋め  
「万象」への投句は昨年10月号からであるが12月号と今年の4月号で次の2句が「万象作品の佳句」として主宰に選ばれている。

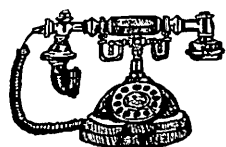
ゆく夏の草に紛るる浮標一つ  
ふる里に風荒ぶころ蕪鮓  
2句目は4月号の準巻頭の1句である。あつと言う間の準巻頭である。

そして、次の4句で巻頭に輝く。  
鳥帰る即身仏の塚の上  
梅林を抜け来て白き美術館  
にはとりのくぐもるこゑや春の雪  
をさな児の寝入れば春の灯を落す  
井端さんおめでとうございます。皆様のお力添えを頂きながら俳句の道を続けたいと控え目な井端さんである。

(南 恵子)

# 万象作品

江見悦子選



○は佳句に選ばれました。

○ガラス器に踊る白き根風信子 武蔵野 松井宣夫

指先を真直ぐ揃へ一年生

タロットに興ずるをんな春愁

春昼やパスタの仕上げアルデンテ

黒潮に万古のうねりつばくらめ 武蔵野 宜野 顕

○春陰やうつほ蠢く潮溜り

夕さりの花橘の香は四方に

暮六つの鐘のおぼろや阿闍梨餅

○春の土撥ね上げ打球青空へ 調布 荒井 仁

グラウンド掻きて零すや花なづな

春の池父の大きな影動く

チューリップ日差しこぼさぬやう開き

○万象の黙に逝きたり月朧 静岡 松永博子

なきがらの口一文字春浅し

花の蕾光たくはへ膨らみぬ

中古帯書肆のワゴンに万愚節

賑やかに岩打つ響き雪解川 金沢 田上ナツ子

○校門に根を張る大樹卒業す

振袖に馴れぬ十三詣かな

馬鈴薯を植うるにうからやから出て

山寺へ涅槃の峠二つ越ゆ

金沢

井端久子

札幌

園田鶴子

雪囲解くや地藏の微笑して

○経堂の古りし万巻春の塵

丈六の膚の金へ花明かり

青き踏む靴は鬼滅の炭次郎

小松島

田上幸子

○腹べこの山羊の咀嚼や犬ふぐり

谷川の流れ堰き止め花見舟

渋滞の車列追ひ越す徒廻路

バスを待つ園児の笑顔春うらら

札幌

石田

睦

春休み子らに賑はふ映画館

白と黄や隣の庭にクロッカス

菜の花の丘をディーゼル一輛車

雪解やあちらこちらで水の私語

昨夜の雨土手一斉に落の莖

斜面よりひかり弾いて雪解水

ボサノバのリズムにゆらり春の風

白き野の端よりかすか春の音

自転車の走り始むる春の道

髪切つて歩くリズムや春きざす

廃村のふる里は今百千鳥

杉山鈴子

杉山和廣

島崎 洋

○一塩のこげ目くつきり桜鯛

猫の耳掠めて白き春の蝶

春暁や音新しき髭剃り機

春セーター明日は早出の枕元

つくしんぼに混じる吸殻二三本

ポケットに満たすキヤラメル春の風

春なれやバター多めのパンケーキ

A列車のリズムに弾む春セーター

北国の蕾のかたき桜待つ

びかびかの新品づくし一年生

足とまる髪にひらりと桜舞ふ

たんぽぽや逆さすべりの子等の声

古里は異国となりぬ路のたう

船橋明美

八代洋子

竹重富子

田邊政代

土門 一平

土門 一

朝ねむし目覚めの早きチューリップ

春陽や折れ木切る音軽やかに

大江

安藤桂花

甍へと続く足跡春の雲

○揚水の落ち合ふひびき雪解川

塔の上棹を正して鳥帰る

仙台

富田洋子

春シヨール行き交ふ街の鏡店

残雪に足を捕られて奥の院

風上に大口広げ鯉幟

新潟

齋藤 信

夜桜やビルの谷間の風速き

○春月や所作美しきバーテンダー

赤や黄のはなやぐ春や風は白

梅咲くや飯屋のありし裏通り

ものの芽を知らせるだけの電話かな

参道に杖かつかつと梅日和

白梅にすける紅梅風かろし

○青き踏む九十五歳の誕生日

鉦の音と読経の和せり外は雪

衛兵の乱れぬ脚や風光る

雪吊の一冬を耐へ確かなる

春泥や豚の市場へ引かれゆく

山田季聰

青々と遠山ふくれ風光る

土手に根を張る胴吹き桜かな

無傷なる春の満月町照らし

燕

渡辺志ま

畑打つや携ふる茶と握り飯

なびきゐる売家の旗や木の芽風

見て乗つて自転車選ぶ新入生

芳賀

稲川清子

散歩道初音に足のとまりけり

草に置く鎌にとびだす初蛙

昨夜の雨満つる椿を崩しけり

福武幸子

○印結ぶ掌に初蝶の真つ直に

桜守腰を大きく反しけり

忘れ雪積り出したる草の上

鹿沼

渡辺利子

うららかや幼寝転ぶ砂利の山

切株に腰をおろして花見かな

花冷えや朝の錠剤ごつくと

栃木

飯塚キミ

ちよつとこい今朝は隣の生垣に

馬衣<sup>うまぎぬ</sup>を掛けられ仔馬目をばちり

介護者の集ひの膳や花の昼

佐野

木村君子

春あした風呂に心身温もりぬ

改築の槌音響く春の風

喜寿祝ふ薔薇の花東部屋に満つ 佐野 木村君子

気晴らしのパズルに遊ぶ春うらら  
春雷の過ぐる時待つ訪問日

濃くあはく風になびける糸柳

仲山さよ子

飛び込んでみたき菜の花畑かな

春雨や雀の声の散りぢりに

ピオラパンジー素焼の鉢を埋めけり

義本美智江

春夕焼昨日と違ふ散歩道

花ミモザ男の肩にラブバード

「北帰行」口ずさみをり鳥雲に ※ラブバード……親愛性の高いインコをいう  
志木 汐見克彦

菜の花やかすかにひびく寺の鐘

散椿点点と紅ぬれそぼつ

○燕来る災ひ多き国なれど

森山洋之助

遣り掛けのジグソーパズル日の永き

急ぐ人の足を止めたり雪柳

春風よ幸せだけを乗せて来い

新座 多田英治

桃咲いて綾子恋しと思ひけり

ひもすがら花見の夢を見て倦まず

○さみどりの風の明るき柳の芽

酒々井 小林あけみ

蘆の間に釣人増ゆる沼の春

耕の涪みし印旛野雨兆す

つちふるや極楽色の西の空

佐倉 新谷八郎

櫻並木けぶりて緑日々に濃し

白粥を堪能したり朝桜

春泥や長靴さげて公民館

有泉正夫

佐渡島朱鷺を育む春田かな

ばね指をこきこき鳴らす春疾風

小雨から夜はしづかに春の雪

杉田富美代

噛むほどに苦味広がる露の聲

高齢者講習終へて風光る

雪形の馬に占ふ農曆

鈴木隆久

啓蟄や蠢くものを吾も秘めて

陽を返す銀のつぶてや猫柳

石段に雛の雅や二千体

鈴木美根子

頬に受くる風のやはらか春めけり

○バリウムの流るる画像花曇

吊橋や一人一人に春の風

米田敏子

蕨折る心にしみる音のして

木苺を友と食み行く山の宿

初夏の旅夫の遺影を胸に抱き

船橋 近藤澄子

風鈴のやさしき音や昼下り

花吹雪しばらく浴びてゐたりけり

老梅の団地の庭に伐られたり

じやがいもの春を感じて芽の数多

皆値上げエイプリルフルと思ひたし

○原発の避難区域や花の雨

大使館警備の靴に花の塵

蛤の椀にひらける潮汁

コンビニにあふるる仏花燕来る

春夕焼新築工事の音止まず

四阿に親子三代初桜

老木の走り根のさき春の蠅

くるくると花びら走る大通り

花の庭バギーの双子上機嫌

やはらかく朝日を弾く春の霜

花屑の川に尾長の水浴ぶる

花よりも団子虫子の黙然と

稲荷社の赤き鳥居や梅真白

夕風や色なほ深き落椿

コスプレの若者あゆむ花の陰

山口秀吉

鹿毛満子

村田由美子

石川幸子

寿多映子

渡部洋子

○桜東風仁王の肩をほぐしけり

初燕九十九里浜ひとつ飛び

サーファアの白髪なびく春の海

正門に日の丸けふは入学式

夜桜の点灯に増す人出かな

一ミリが五ミリとなりぬ蝌蚪の群れ

雪をんな裏日本を白色に

バレンタインチョコを横取る妻がゐて

初午や抱一作の幟立ち

入学す鞆に夢を詰め込んで

にはたづみに容崩さぬ落椿

館跡今は庭園青き踏む

土手歩む花一輪の小宇宙

大川に鳥群れゐたり花筏

花の雲パドルの音のキーと鳴り

囀や一本残る大櫟

気にかかることなき一日春の星

日差しうけ若やぐ家並花蘇枋

こでまりの路地回覧を回しけり

大仏の肩に枝垂るる桜かな

市川 奥澤よし江

東京 安藤美酒々

大場八朗

北口富栄

齊藤孝夫

高野翠子

中澤桃子

春寒し生姜葛溶く夕べかな  
幼子のけん玉かちかち春うらら

東京

橋本紀代子

蒼空や臘梅青に染めぬたる  
傘持たぬ手押し車や春の雨

○棕櫚の毛羽嘴に垂らせる巢組みかな

長谷川信也

寝かせ置く塾の銀輪春一番  
笹鳴を追へばいつしかけもの道

○雪割草風に乗りたる子らの声

南場雅子

京菓子の薄紙ふはと春惜しむ

馬場美智子

花の雨励まし合うて別れけり

ほんのりと羊の肌の毛刈りあと

府中

竹村晃子

春昼や古里の町素通りし  
冴返る松本城の鯉黒し

平子甲奈

残されし猫饒舌に遅日かな

奥多摩の沢に山葵の花の白

日野

松原悦子

空色の旧制校舎東風の中  
マスクして顔がわからず万愚節

平澤一宏

嫁ぐ日の庭に盛りの八重桜  
婚の荷の覆ひに家紋花吹雪

青梅

横井一美

大木に鳥の集団春を呼ぶ  
街灯に照らされ浮かぶ桜かな

前川昇

春の泥ひさかたぶりの雨吸つて

青梅

横井一美

花吹雪雨より先に散り始め  
花びらをひろふ幼児と手をつなぎ

寒卵かけて一人の昼御飯  
暖かや赤子の踵柔き

横浜

大駒泰子

ランドセル背負ひて並ぶ新人生  
道の辺に薄桃色の落椿

宮崎正義

○花木五倍子ゆらゆら磴をゆつくりと

花吹雪初めて背負ふランドセル 元枝

横浜

春愁や秒針速き我が余生

相続の済みし屋敷や竹の秋

愛らしき動物もをり吊し雛

二月果つテレサテン聞く風の夜

ころころに太れる鰯猫余す

外つ国の少女の憩ふ花の陰

若人の春服軽く中華街

窓越しのグランドピアノ花の風

冬の蝶日差しをもとめ垣根越ゆ

冬鳥の幹わたりゆく庭の奥

冬ざれや土塊崩す土竜塚

雪催ねぐらへ帰る鴉二羽

黄水仙誰が供へしや道祖神

○春泥に晴れ着の裾をたくし上げ

いくたびも「カンパイ」桜吹雪かな

花大根境界線をうやむやに

春愁や子と話したき事ありて

水温む寺領の鯉のゆつたりと

茎立菜土の匂の雨上がり

松田

古谷悠紀子

川崎

横山ユキ子

長野高朋

柴田雅春

坂本具子

加藤和子

せせらぎの音を抱きて春の星

歳時記と句帳を背に花見酒

花月夜師へ献杯の手の震へ

提灯のずしりと垂るる花の城

富士仰ぐ浜の飯屋のさくらえび

昭和の日アナログ通す頑固者

○日差し吞む乙女椿の色増せり

屋根を打つメトロノームや春の雨

○あたたかき屋根裏部屋や秘密基地

軒下の白き染み跡燕待つ

心の鬼しづまる今朝の花見かな

下駄箱に二足残して卒業す

開帳の秘仏は黒き念持仏

朝霞伊豆半島を包みたる

二度三度母を振り向く新入生

亡き姉の絵手紙読める春の夕

春の雷ひとり湯船に聞きゐたり

緋の色のビロードのごと木瓜の花

弾みたるドリブルの音風光る

ウオーキング彼岸参の供花を摘み

静岡

飯田優子

伊東文恵

海野俊彦

杉田義則

杉山千鶴子

杉山巳代

高井明子

紫木蓮屋敷の塀をこぼれ落つ

静岡

野崎浩子

豆腐屋の軒を掠むる初燕

静岡

高橋一夫

啓蟄や空へバットの打球音

静岡

高橋一夫

○風吹けば沖に白浪菜の花忌

静岡

高橋一夫

初燕出漁の船一斉に

静岡

高橋一夫

参道の黄の濃くなりぬ杉の花

静岡

高橋一夫

永き日やまづ出刃を研ぎ夕仕度

静岡

高橋一夫

朝の膳運ぶ霞の高野山

静岡

高橋一夫

師の遣影桜の花に囲まれて

静岡

高橋一夫

手作りの木目込雛涼やかに

静岡

高橋一夫

盆栽の花桃一樹通り過ぐ

静岡

高橋一夫

雪吊の縄ひゆるひゆると伸びにけり

静岡

高橋一夫

寒明や園児の声の晴れやかに

静岡

高橋一夫

薄氷のゆつくり動く心字池

静岡

高橋一夫

○春の星畝むくむくと蠢きぬ

静岡

高橋一夫

黒砂利に染むる雨粒黄水仙

静岡

高橋一夫

逆光の釣鐘堂や春の夕

静岡

高橋一夫

草へ落つる紅の濃き椿かな

静岡

高橋一夫

手水場の手拭真白春日浴び

静岡

高橋一夫

見習ひの腕章白き四月かな

静岡

高橋一夫

昼食にあめ玉ほどの彼岸餅

静岡

野崎浩子

春の雪師の計を聞ける夕つかた

静岡

野崎浩子

兩岸の桜抱へて川流る

静岡

野崎浩子

春灯や用心籠の飴色に

静岡

野崎浩子

風光る読経響ける宿場町

静岡

野崎浩子

桜海老漁を戻れり富士背負ひ

静岡

野崎浩子

春風や櫂の枝のうすみどり

静岡

野崎浩子

花吹雪法被賑はふ城址かな

静岡

野崎浩子

ミモザ咲く医院の庭の立ち話

静岡

野崎浩子

かたくりの花は師の花風そよる

焼津

小梁洋子

春キャベツスープの色の透きとほり

焼津

小梁洋子

○ぼつかりと弥生の月のかるさかな

焼津

小梁洋子

初蝶やロンドのやうに庭に舞ひ

掛川

鈴木美由紀

馬鈴薯植う栽培記録首つ引き

掛川

鈴木美由紀

逝きし師の文読み返す鳥雲に

掛川

鈴木美由紀

沈丁の匂ふ朝や師の計報

掛川

鈴木美由紀

路味噌の小鉢に添へて利休箸

掛川

鈴木美由紀

春の灯の暗きに潜む猫一匹

掛川

鈴木美由紀

菜の花を一輪飾る宗易忌

金沢

北野陽子

夜桜に灯りて城の光りたる

金沢

北野陽子

古き家の庭に胴吹き桜かな

金沢 新出祐子

※テラ……地球観測衛星

良き友や梅ほころぶと告げ来る

紅梅の大き小さきの順不同

島の子の返事大きく入学す

菅原雅子

熱き湯に五体ほどくる花疲

松明の余韻に酔へるお水取

廣田宏美

日の射して廂の氷柱したたりぬ

風花の一片はりつく硝子窓

日捲りをめくればもはや二月果つ

松田好子

藪椿 一樹に千の花点る

○花筏水をおしわけ鯉の髭

春の昼足場組まるる音高し

宮崎惠美

地に落ちて終の色なり紅椿

海の上に座る連峰鳥帰る

春の雪一夜に嵩のぐんと減り

かほく 能任康子

佐保姫の衣擦れかすか奥の間に

東北の人待ちたるか牡丹雪

春休み鴨居に余る孫の丈

白山 朝倉みゆき

博多織の夏帯の彩母恋ふる

利休梅白き蕾の立ち並び

初初しく白梅弾むみ空かな

白山 鶴尾正江

雛飾る女三代姦しく

空かけて芽吹き賑はふ奥獅子吼山

敦賀 川口和代

おだやかな波を選びて流し雛

貝寄風や海原の蒼かがやかせ

鳥帰るまた新しき余生生く

徳島 林 早苗

うづくまる猫に声かけ月朧

朧夜のページにはさむ葉かな

立春や靴履きかへて髪切りに

山本瑤子

たそがれの庭に真白き梅一樹

春の風邪ゆきひらの粥吹きこぼれ

黄をまとひ小さき初蝶舞ひ上る

松山 入河大河

草萌えてきらりちらりと日の差しぬ

春寒や下校の風の元氣よく

つかの間の晴れ間きらめく牡丹雪

福岡 園田清子

公園のベンチ満席日向ほこ

かるかんは古里の味山笑ふ

主無き家にあまたの菫咲く

竜宮のごとき水槽春の亀 福岡 鶴田輝代

引揚げ碑へしばし合掌百千鳥

作業船互ひに振る手風光る

飛梅や菅公の和歌口出づる 太宰府 美山留唯

万葉の手作り衣裳梅真白

齒科助手の齒磨き指導シクラメン

○山笑ふまんぢゆう焼いて五十年 那珂川 高山ひさ子

霾や声震はせて選挙カー

永き日の寝そべつて聴くコンサート

弁当に桜ひとひら我ひとり 門川 請関ゆかり

東屋に相席請うて花見酒

花吹雪飛ばすワイパー今発車

給食に浮かぶ花麩や雛祭 国富 山口孝治

春めくやわれ呼ぶ窓に子の笑顔

紅椿蜜吸ふ鳥の枝移り

逡巡の免許返納葱坊主 那覇 稲嶺有晃

連翹の一枝勝手に気まぐれに

躑躅咲く丘草創の学生歌

うりずんやちひさき島の小さき路地

○釣人はみんな島の子若夏来

大城末治

路地はみな海へ梯梧の花盛る

清明祭野辺の祠の小さき階 那覇 高嶺容道

日に褪せし躑躅の赤を友の忌に

緋桜や登記所からの戻り道

茅花野の慰霊碑群や海の風 辺野喜宝来

糠雨に恋猫の声途切れたり

○駅間へば彼も旅人花マンゴ

蕾ほどく妻の忌日のヒヤシンス 沖縄 玉城玉常

卓球場軒の低きに燕の巢

塀の闇跳んで消えたる浮かれ猫

春夜酌むジョージアワインの琥珀色 ベリシ 森尾

野遊の子ら大枝を曳きゆけり 舞

春の空飛ぶ雲海に入り日かな



毎月25日発売  
定価1000円(税込)

# 俳句界

2025年7月号

特集

## 60代俳人

○近作とエッセイ

野中亮介 河原地英武 小林貴子

小川軽舟 岸本尚毅 照井翠

土肥あき子

＜＜＜＞＞＞ 俳句界NOW 名久井清流

特集 『第一句集』大解剖

○俳人にとつての『第一句集』とは

高柳克弘

○より楽しくなる! 『第一句集』の読み方

佐藤郁良

○『第一句集』裏話

中原道夫 駒木根淳子 井上弘美

関悦史 岡田一実 堀本裕樹

『海、山、人、黙す! 震災と言葉』展

(詩人) 座談会 季村敏夫×高木佳子×渡辺誠一郎

(歌人) 司会・小池昌代

【注目の句集】 福本弘明 『梨の木』

【巻頭】 宮坂静生 青木亮人 栗林浩 坂口昌弘 ほか

「俳句界」投稿欄

一流退者11名!  
充実の投句欄

※一部変更の可能性あります。



株式会社文学の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F  
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

# 俳句

7月号  
予告

6月25日発売

予価1,100円(本体1,000円)⑩

巻頭作品50句 西村和子

作品21句 岩淵喜代子・山口昭男

## 水のさまざま

特集

合評シンポジウム採録

## 怖い俳句

宮部みゆき×夏井いつき×  
高野ムツオ×神野紗希

## 句集特集 福永法弘句集『永』

第59回 蛇笏賞 受賞第一作21句……三村純也

角川俳句賞作家の四季(夏)15句……若杉朋哉

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

# 万象作品の佳句

江見悦子

ガラス器に踊る白き根風信子 藪野出 松井宣夫

「風信子」はヒヤシンスの和名。この和名について、一説には花の香りが風に載って遠くまで届く様子を表現したものという。地中海沿岸原産のこの花を、日本では水栽培で楽しむ事が多いようだ。この句、「踊る白き根」が良い。「踊る」のはバレリーナ、「白き根」はバレリーナのスんなりとした脚、ガラス器の中の軽やかで美しい舞台を想像した。花を言わずに根に目を留めたところが個性的。

春陰やうつぽ 蠢く潮溜り 宣野海 宣野 顕

季語「春陰」は曇りがちな春の天候をいう。磯に遊ぶ作者は潮溜りの一つにうごめく「うつぽ」を見つけた。うつぽは大きな口と強靱な歯を持ち、「海のギャング」と呼ばれるが、食べると淡泊な味でなかなかいけるそうだ。掲句の「潮溜り」に残されたうつぽは、思わぬ事態に慌て、身体をくねらせて蠢いているのだろう。珍しい光景に出くわしたものと驚く。「うつぽ蠢く」にうつぽの膚のぬめりと、春陰の日の生暖かさを感じた。

春の土撥ね上げ打球青空へ 綱布 荒井 仁

平易な言葉で表現された省略の効いた句。ゴルフコースの光景だろう。振り下ろしたクラブが柔らかなフェアウエー

の春の土を撥ね上げ、ボールは青空へ。「春」「撥ね」「打」「青」と、ア音の頭韻がリズムカルで作者の爽快感が伝わる。動きのある、若々しく気持の良い句。

万象の黙に逝きたり月隴 静岡 松永博子

曾根満氏を偲んだ弔句。静岡満点会で同氏の指導の下、俳句の魅力に目覚めた作者にとって、同氏の逝去は大きな衝撃だった。「万象の黙」には、「森羅万象」の万象と、結社「万象」が重ねられている。釈迦入滅の場面を描いた涅槃図のイメージが浮かび、「月隴」の季語がはかなく美しい。

校門に根を張る大樹卒業す 金沢 田上ナツ子

「根を張る大樹」は樟か、樺か、銀杏かもしれない。何であれ、校門を行き交う生徒たちに夏は影を作り、冬は雪を積もらせて、学校のシンボルとして愛されてきた大樹である。「根を張る」に、今まで果立っていった生徒たちや学校の歴史を思う。卒業生への祝福と応援の気持のこもった句。

経堂の古りし万巻春の塵 金沢 井端久子

季語「春の塵」は、春の強風に吹かれて舞い上がり、降り積もる小さな塵や埃を指す。作者は経堂の中にいるのか、経堂の外で内部を想像しているのか、いずれにしてもうず高い経文の束には春の塵が積もっている。異空間に心を遊ばせている作者。「古りし万巻」が良い。

腹べこの山羊の咀嚼や犬ふぐり 小松島 田上幸子

「腹べこの山羊」が面白い。まどみちお作詞・團伊玖磨作曲の童謡「やきさんゆうびん」のメロディが聞こえてくるよ

うだ。山羊は、西アジアで紀元前7千年頃から家畜化され、肉用、乳用、毛用として、その人懐こい性格からも人々に親しまれてきた。もっぱら草を餌とするので、除草の役割をも果たす有用な家畜である。犬ふぐりの原で草を反芻している山羊の姿が明るく楽しい。

春泥をかはす蛇行の三輪車 札幌 園田鶴子

学齢前の子が、春泥を避けながら三輪車を漕いでいる。蛇行しながらの懸命な運転である。子供ながらいっぱしのドライバー、それを応援する作者。「蛇行の三輪車」が優しい。

春月や所作美しきバーテンダー 新潟 齋藤 信

春の月は、秋の月のさやけさとは違って朧なるを愛でるといわれる。カウンターに座る作者はバーテンダーの所作に見とれている。春の月夜は、独り美酒を嘗めるにふさわしい。

印結ぶ掌に初蝶の真つ直に 芳賀 福武洋子

印を結んでいるのは露座の仏。その手の平に初蝶が真直にやつて来た。まるで挨拶をするかのように。大と小、無生物と生物、硬いものと柔らかいもの、二つの対照的なものの幸せな出会いを詠んだ。

バリウムの流るる画像花曇 佐倉 鈴木美根子

バリウムを呑んだあとのレントゲンで、自身の胃の投影を注視している作者。内臓の形がはっきりと映しだされている。「花曇」の季語が不安感を表現しているが、異常なく終えられたことと思う。自身を客観視した新しみのある句。

花木五倍子ゆらゆら燈をゆつくりと 横浜 大駒泰子

石段をゆつくりと上って行く作者。近くには木五倍子の花が長い黄色の花穂を揺らしている。「花木五倍子ゆらゆら」で切れる句またがりの一句。「ゆらゆら」「ゆつくり」との表現が呼応してのどやかな気分を感じさせる。

あたかき屋根裏部屋や秘密基地 静岡 海野俊彦

子供時代、誰からも離れて自由になれる空間が屋根裏部屋だった。作者は秘密基地と呼んでいたが、そこでは身も心も暖かく感じられた。似たような経験は誰にもあるに違いない。懐かしい思い出を詠んだ。

ぼつかりと弥生の月のかるさかな 焼津 小梁洋子

弥生の月を「かるさ」と表現した。(外にも出よ触るるばかりに春の月 中村汀女)の滴るような月を愛でるのはもう少し先、早春の月を感覚的に詠んだ。

山笑ふまんぢゆう焼いて五十年 那珂川 高山ひさ子

山の麓にある和菓子屋の名物は饅頭。村落の人や登山客が時折買い求める素朴な味だ。店を開いて五十年になるという。「山笑ふ」の季語の幹旋が秀逸、おかしみたつぷりの句。

釣人はみんな島の子若夏来 那珂 大城末治

「若夏」は沖繩の季語。旧暦4〜5月の稲穂の出る季節をいう。若夏を待つて、海岸には釣人が集まって来た。まだ日焼けをしていない、島に住む子供たちだ。これから長い夏が始まる。若夏を迎えた爽快感と、島への挨拶の句。

# 新中央句会報（4月例会）

令和7年4月27日（日） 東京文化会館

（出席22名）

## 江見 悦子 主宰選

|                  |       |
|------------------|-------|
| 山の辺の山藤藍を滴らす      | 塗木翠雲  |
| ときめきの名や惜春の古日記    | 三屋英俊  |
| 日の眩しなんちやもんちやの白眩し | 星野信子  |
| 稜線に月の滴る朧かな       | 一由久美子 |
| 虫出しの雷のあそべり遊水地    | 下嶽孝一  |
| 炙られて縮む鰯や桜冷え      | 三屋英俊  |
| 桂郎の墓あの辺り藝鳴けり     | 吉中愛子  |
| 曇天を押しあげてゆく森若葉    | 村田由美子 |
| 咲き満ちて空見失う八重ざくら   | 長谷川信也 |
| 青葉光包みて孔雀羽たたむ     | 中村千久  |
| 焼け跡に連なり生ふる蜷草     | 吉中愛子  |
| ①海に出て揉まるるばかり花筏   | 柳澤宗正  |

②海に出て揉まるるばかり花筏 柳澤宗正  
川面を漂っていた花筏が、ついには大海に出てか寄りかく

寄り波間を漂い始める。海に出る間に花びらは色を失い原形をとどめていない。「揉まるるばかり」の措辞が人生を連想させ、広がりのある味わい深い句となった。山口誓子の〈海に出て木枯帰るところなし〉の感懐にも通じる。

日の眩しなんちやもんちやの白眩し 星野信子

「なんちやもんちや」が話題に上る季節となった。モクセイ科の落葉高木の「ひとつばたこ」の木で、高さ20m。5月頃白く細い裂片の花を多数つける。名の「たこ」はトネリコを指し、単葉なので「一つ葉たこ」となる。明治神宮外苑で珍しい木とされ、「なんじやもんじやの木」と呼ばれるようになった。この句、純白の花が群がり、日に輝いている。「なんちやもんちや」を挟んだ「日の眩し」「白眩し」のリフレインが成功した。見上げる空は晴れ上がった青空に違いない。

桂郎の墓あの辺り藝鳴けり 吉中愛子

「桂郎」は俳人・随筆家・小説家・編集者として才能を発揮した石川桂郎のこと。亡くなるまでの30年間を、作者の住む町田市（当時鶴川村）で過ごした。「俳句研究」「俳句」等の編集長を歴任し、「風土」の主宰となった。掲句は、桂郎の代表句〈昼蛙どの畦のどこ曲らうか〉（うらがへる亀思ふべし鳴けるなり）を下敷きにしている。「風狂の俳人」とも

呼ばれた桂郎は様々なエピソードに事欠かない。桂郎を愛してやまない作者の一句。

咲き満ちて空見失う八重ざくら 長谷川信也

八重桜の満開の様を詠んだ。恐らく、花が大きく芳香のある里桜だろう。見上げると空いっぱいの八重桜、濃い桃色と香りに見惚れている作者。「空見失ふ」が作者の認識だろう。

### 中村 千久 選

ときめきの名や惜春の古日記 三屋英俊

きつね雨なんちやもんぢやの花けぶる 江見悦子

稜線に月の滴る朧かな 一由久美子

地方紙に桜の便り旅の宿 大久保 進

初蝶や能登よりの人來るといふ 田中道江

風さやぐ葉裏にひそと花楓 大久保 進

暮色濃し柳絮振りつむ川堤 砂地宏子

長持の金箔曇る花は葉に 一由久美子

ネモフィラに染りし丘よ聖五月 安藤美酒々

釣り上げる春光獲物もろともに 下嶽孝一

海に出て揉まるるばかり花筏 柳澤宗正

④ 沼尻は明るかりけり春時雨 内田郁代

④ 沼尻は明るかりけり春時雨 内田郁代  
「沼尻」は沼の水が流れ出るあたりのこと。「春時雨」がさつと通り過ぎた後、遠くに見える沼尻に日が射していた、そんな明るい情景を思い描くことが出来る。「明るかりけり」といふ文語表現もその音がもたらす効果も、一句にあって実によく働いている。

稜線に月の滴る朧かな 一由久美子

清少納言が「山ぎはすこし明りて」と言ったのが、掲句にある「稜線」。作者はそのほのかな明るさを、朧月からこぼれ落ちてくる光であると捉えた。「月の滴る」がいいなあ。かな止めも心地よし。

初蝶や能登よりの人來るといふ 田中道江

句会でも「季語の力」ということがよく話題になるが、掲句の上五に据えた「初蝶や」がよかった。大震災に見舞われ、復興未だしの「能登」からの訪問客があるのだ。被災地を詠んだ悲しい句が続いたあとだからこそ、この「初蝶」に救われる思いがあった。

三屋 英俊 選

きつね雨なんぢやもんぢやの花けぶる 江見悦子

稜線に月の滴る朧かな 一由久美子

虫出しの雷のあそべり遊水地 下嶽孝一

朝採りと売り子の声や松葉独活 松井宣夫

蝶蝶に香の好き嫌ひあるのやら 久保村淑子

口明けの男の下駄に春の泥 中村千久

曇天を押し上げてゆく森若葉 村田由美子

花冷えや解剖室に無影灯 中村千久

のんこうの茶碗にまみゆ暮の春 久留島規子

青葉光包みて孔雀羽たたむ 中村千久

海に出て揉まるるばかり花筏 柳澤宗正

① 山の辺の山藤藍を滴らす 塗木翠雲

② 山の辺の山藤藍を滴らす 塗木翠雲

③ 山の辺の山藤藍を滴らす 塗木翠雲

「滴らす」が、山藤の短い花房の姿ならではの表現。藍も

滴りの色。背景は青空。見上げると木の天辺まで巻き上がった

た藍色の花房が空の青に繋がりに、同じ色の花房が下の方まで

点々と。樹林の緑の中に淡い藤色の滴り。目に優しい景色。

「きつね」「なんぢや」「けぶる」の言葉の流れから、句に  
幻想的なしつとりとした雰囲気が漂う。私にはこの句が、嘗  
て良太先生と一緒に見上げた香取郡神崎神社の満開時の「な  
んぢやもんぢや」と重なって、一際心に沁みてくる。

青葉光包みて孔雀羽たたむ 中村千久

「包みてゝたたむ」がいい。しかも包まれるのが羽を開い  
ている時の孔雀同様エメラルドのようにキラキラと輝く青葉  
光。耀き倍增。羽がたたまれてもその眩しさは眼裏に残り、  
読む者にも鮮やかにそれらが見える。句が光っている。



今後の新中央句会の予定

▽7月27日(日) 東京文化会館 中会議室 13時より

▽8月31日(日) 大妻学院(千代田区三番町)

G棟411室 13時より

# 第18回「万象」千葉県支部 俳句大会 報告

日時 令和7年5月8日(木)  
会場 松戸市民会館

参加者 29名(県外からの参加4名)

爽やかな五月晴れの吟行日和となりました。千葉県内の同人・会員は元より江見主宰を始め東京都、神奈川県からも来賓のご参加を頂き、賑やかな大会となりました。

松戸駅の西側には江戸川が流れ、所に松戸宿の名残を感じながら、坂川沿いにある松戸の総鎮守・松戸神社を眺めることが出来ました。線路を挟んで坂を上ると国指定の名勝・旧徳川昭武庭園(通称・戸定邸)へ繋がっています。戸定邸は最後の将軍・徳川慶喜の弟にあたる徳川昭武がこだわりぬいた庭園で明治期の徳川家の住居で一般公開されています。

沢辺たけし千葉県支部長の開会の言葉に続き、江見悦子主宰、中村千久編集長のご挨拶を頂き予定通り大会を開

始しました。

参加者の投句・選句は共に四句、主宰、編集長、沢辺さん、榎本さんには十句選、他の選者には七句選を頂きました。各選者から有意義な選評をいただき、閉会の挨拶の後、集合写真を撮影して賑やかな大会を終了致しました。

## 江見悦子主宰 特選

万緑にカーブミラーのふくらめり 中村千久  
坂川のひかり吸ひ上げ棕櫚の花 穂荅照子

## 中村千久編集長 特選

夏蝶の瑠璃きらめかせ敷を出づ 砂地宏子  
胴長で浚ふ坂川夏来る 杉田陽子

## 沢辺たけし 特選

薫風や葵の紋の釘隠 内田郁代  
胴長で浚ふ坂川夏来る 杉田陽子

## 榎本文代 特選

薫風や葵の紋の釘隠 内田郁代  
山本とく江 特選

富士望む戸定が丘や風薫る 小林あけみ

## 内田郁代 特選

緑蔭にたどる晶子の歌碑いくつ 中村千久  
三屋英俊 特選

江戸川の風にのり来し夏燕 榎本文代

(塗木翠雲記)



〔編集部から〕

## 「ノマ点」をめくって

編集長 中村千久

「万象」誌の校正担当者は現在わずか2名、それに編集長が加わって、初校、再校、最終校正と、校了日を迎えるまでの半月はガラとのにらめっこが続きます。こうして6つの目で何度も見てもミスが出ることに、忤怩たる思いをすることが幾度となくあるのが実情です。

### 閑話休題。

文語表記や送り仮名、漢字表記や数字表記など、「万象」誌上での校正基準を設けてそれに従って作業を進めています。原則は「広辞苑」と「角川俳句大歳時記」に拠ることとしていますが、こうした中で、令和5年4月以降、「ノマ点(々)」を使用しないこととしてきました。それは「広辞苑」がこれを用いていないことに従ったものです。「人々」は「人人」のように校正してきたわけです。

然しながら、これについて違和感があるところご意見も寄せられますので、岩波書店辞書編集部に問い合わせ、丁寧なお返事をいただきました。「広辞苑」編纂に当たっては、「ノマ点」は繰り返しの符号で文字ではないので、辞書には用いない基準を立てたとのことでした(「蝶々夫人」などの固有名称は例外)。

辞書編纂に係るこの基準は、一般に及ぶものではないとの回答も得ましたので、7月号からの「万象」誌上では、「ノマ点」の扱いを、旧に復することと致しました。

ご了承くださいますようお願い致します。

### 第24回俳句四季大賞

### 中村和弘『荊棘』

### 第13回俳句四季新人賞

### 山海和紀

### 第8回俳句四季新人奨励賞

### 有瀬こうこ・田中木江

### 第12回俳句四季特別賞

### 森田純一郎『街道』

受賞作品・選評・選考座談会を掲載  
新人賞最終候補者発表

### ◎巻頭三句

対馬康子／堀本裕樹

鈴木太郎／鹿又英一

名取里美／辻村麻乃

### ◎今月の華

内村恭子／拔井諒一

### ◎俳句と短歌の10作競珠

高勢祥子＋藤井柊太

### ◎今月のハイライト

「小熊座」創刊40周年

### ◎「HOKU」私の源流

八田木枯……蘭草慶子

### 第25回「俳句四季」

全国俳句大会結果発表

### ◎好評連載

成瀬政博

とちあすの日々

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句のまなざし

井上泰至

俳句の詩題

イメージ辞典

神作研一

てのひらの江戸

古典籍を旅する

高田重三郎の手掛けた本の題名を掲載

藤村公洋

俳句のつまみ

堀田季何

俳句四季  
Haiku Shiki

2025年7月号

6月20日発売  
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

# ルビーの小函 (7月号)

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- |                |                  |
|----------------|------------------|
| 7 鱒 (えい)       | 23 産土神 (うぶすな)    |
| 春北風 (はるならい)    | 塙 (ねぐら)          |
| 8 鼬 (いたち)      | 24 復習ふ (さらう)     |
| 鰓 (えら)         | 守る (もる)          |
| 9 荒ぶ (すさぶ)     | 苜蓿 (うまごやし)       |
| 楡 (にれ)         | 25 料峭 (りょうしょう)   |
| 11 激つ (たぎつ)    | 花貝母 (はなばいも)      |
| 12 鳥交る (とりさかる) | 石斑魚 (うぐい)        |
| 岳樺 (だけかんば)     | 26 畏まり (かしこまり)   |
| 13 斑雪野 (はだれの)  | 石蓴 (あおさ)         |
| 黙 (もだ)         | 家苞 (いえづと)        |
| 14 漲る (みなぎる)   | 拭む (えらむ)         |
| 鶴 (こう・こうのとり)   | 阿蘭更紗 (オランダさらさ)   |
| 巴波川 (うずまがわ)    | 霾ぐもり (よなぐもり)     |
| 三疊嶺 (みかもね)     | 鏽 (さび)           |
| 長くる (たくる)      | 嵩なす (かさなす)       |
| 15 雉子 (きぎす)    | 27 塗し (まぶし)      |
| 裾廻 (すそみ)       | 浚ひ (さらい)         |
| 潮仏 (しおほとけ)     | 28 嘎れて (しわがれて)   |
| 蘆牙 (あしかび)      | 寄生虫 (やどかり)       |
| 16 渡舟 (としゅう)   | 針魚 (さより)         |
| 乾通り (いぬいどおり)   | 蔓延れり (はびこれり)     |
| 17 森森 (びょうびょう) | 29 徒遍路 (かちへんろ)   |
| 嘗て (かつて)       | 30 蜚 (あま)        |
| 信楽 (しがらき)      | 44 膚 (はだえ)       |
| 野梅 (やばい)       | 47 容 (かたち)       |
| 19 滾る (たぎる)    | 48 行在所 (あんざいしょ)  |
| 20 舂挿す (えりさす)  | 花木五倍子 (はなきぶし)    |
| 22 嗽 (うがい)     | 52 梯梧の花 (でいごのはな) |
| 23 霾 (つちふる)    | 56 鰯 (するめ)       |
| 青饅 (あおぬた)      |                  |

# 北 南 西 東

## 消 息 等

江見悦子主宰、小林愛子名誉顧問の句

「くぢら」5月号に

良太逝きつばり晴るる雪の富士 悦子

寒月に別れの杯を満たし置く 愛子

「伊吹嶺」5月号に

人訪はな三日の空のうす濁り 悦子

やり直し間に合はねども新暦 愛子

「たかな」5月号に

空揺りすずかけ黄葉乾く音 悦子

奈良般若寺探訪

小池清晴

私が訪れたのは3月中旬、桜開花前で

あった。粗末な入口と受付から境内に入ると、

荒寺ではないかと思わせる光景が広がる。観光客は一人もない。水仙が庭を覆

い尽くしている。手入れをしている様子はない。もしかすると、これは寺の演出では

ないか？との憶測さえ生む。そんな寺にくつもの重要文化財(文殊菩薩等)と国宝

(楼門)があるというのだから驚きだ。そして、多くの俳人がここを訪れていること

は句碑を見れば分かる。以下ご紹介しよう

般若寺の石仏かざる水仙花 明 奎

般若寺に返り咲くや八重山吹や 多津良

散りたまる花や般若の紙の向き 去 来

般若坂いくさがたり夏に夏の塔 沙 波

大塔宮在せし寺や百日紅 小 牛

獅子の背の菩薩涼しくをがまる 玉 骨

般若寺やほとけの庭に秋ざくら 明 奎

及び立つ花野の寺の笠塔婆 日月子

唐びとが月をろがみし笠塔婆 秋櫻子

ちちろ虫十三塔をつつみ鳴く 一 邑

般若寺のつり鐘ほそし秋の風 子 規

外向きに立たせる諸仏鵬高音 玉 骨

秋の日の十三塔や日は西に 素 十

般若櫃うつろの秋のふかさかな 青 畝

「柏吟行句会」3月26日 参加10名

松戸市内(松戸神社・戸定邸) 吟行

四阿に親子三代春うらら 村由美子

春の水竜の口より溢れ来し 渡部洋子

昭武も愛でし花かも糸桜 塗木翠雲

戸定邸美しき書家の字緑さす 久保村淑子

日輪の月のごとくにつちふれり 田中道江

第36回俳人協会千葉支部俳句大会

(ホテルポートプラザ千葉にて4月27日開催)

伊藤素広 選

底冷えや軍隊手髷仏壇に 田中道江

葛西茂美 選

風を咬み蟬螂翅を広げたり 沢辺たけし

荒井ハルエ 選

大空に羽ちぎれさう揚雲雀 沢辺たけし

滝口美智子 選

小春日やぱりつと熱きヒザの耳 穂刈照子

第42回信州さらしな・おばすて観月祭全国

俳句大会 募集句選者に江見悦子主宰

日時 10月12日 11時〜15時

場所 千曲市総合観光会館

事前募集句 雑詠3句1組

千円(定額小為替)

投句方法 所定の投句用紙または原稿用

紙・便箋の使用可。

投句締切8月31日

投句先 長野県千曲市稲荷山90-5

「さらしな・おばすて全国俳句大会」宛

令和7年度芭蕉翁献詠俳句募集

投句料 無料 投句締切 7月31日

応募方法 葉書(一枚に2句まで)

詳しくはホームページ参照

\*各地の句会や吟行、俳句に関する面白い記

事をお寄せ下さい。宛先は編集部小池清晴

k217122go@forest.ocn.ne.jp

(報・編集部)



939-0364

射水市南太閤山13  
|  
24

# 万象作品投句係行

110円切手を  
貼ってください

| 氏 名 | 住 所 |
|-----|-----|
|     |     |

〈通信欄〉

令和7年度「万象」全国俳句大会作品投句用紙

- ・ 投句は一人4句以内
- ・ 八月十五日(金)必着

|     |            |
|-----|------------|
|     | 都または市・町・村名 |
| 姓 号 | がなり        |
|     | 年齢         |

(句の表記は歴史的かなづかいで) (\*の枠内には何も書かないでください)

|   |  |
|---|--|
| * |  |
|---|--|

[illegible][illegible][illegible]

165-0022

東京都中野区江古田 4-12-11

一由久美子様

110円切手を  
貼ってください

|      |                    |
|------|--------------------|
| 住所   | (〒       -       ) |
| 氏名   |                    |
| 電話番号 |                    |

## 編集後記

▽体育の授業でバスケットボールをしたときに、「ピポット」(＝回転軸)という言葉に出会いました。ドリブルをしながら一度止まると、軸足を動かさずに、もう一方の脚だけを動かしてパスする相手を探す、あれです。

私たちが探している「新しみのある俳句」がこれによく似ています。軸足となるのは写生！ブレるとファウルになります。軸足の周りを回転して、相手を探す円弧の中に「新しみ」がみつかるはず。脚の広げ具合や、広げる方向に個性が生まれるはずです。明易の夢が教えてくれました。(千久)

▽令和7年も早や後半に突入しました。今月の裏表紙には、秋の全国俳句大会・同人会総会のご案内を掲載しております。昨年とほぼ同じ内容です。皆様のお申込みをお待ちしております。なお、大会作品集は、東京支部が担当いたします。巻末の投句用紙で作品をお送り下さい。(規子)

▽五月雨は旧暦5月に降る長雨とあるが、今年は連休前から雨が多かった。連休前から茶摘が始まり、蜜柑の花が咲き、連休直後から栗の花穂が伸び始めた。温暖化が確実に進み、季語と季節に誤差が生じている。(美穂子)

▽気象庁によると、7年9ヶ月続いた黒潮の大蛇行が終息する兆しがあるという。もしそうなれば、漁業にも気候にも多少変動があるとか。東海地方や関東地方の気温と降水量は少し下がるとか。神宮の森の破壊等で益々ヒートアイランド化が進む東京も期待してよいのだろうか。(宏子)

▽毎年、晩春に茨城の友人より春筍3〜4本が届く、これで友の無事を確認することができる。また、妻と二人では食べ切れないのでお隣さんとお肉屋さんにお裾分けする。すると、即日物々交換しながらに他の食品が戻ってくる。今年は、お隣さんからは手作りのケーキ、お肉屋さんからは玉葱、ヨーグルトであった。皆の元気の証としての食物連鎖である。(清晴)

## 会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

一年分 一、二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 002300・0103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

## 万象 七月号

第二十四巻 第四号

通巻 第二八〇号

令和七年七月一日 発行

主宰 江見悦子

発行人 江見悦子

編集人 中村千久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一-31-603

万象発行所

☎〇三六三三四一五七九六

# 令和7年度「万象」全国俳句大会・「万象」同人会総会 案内

開催日 令和7年10月27日(月)

午前11時(午前10時30分より受付開始) ～ 午後4時終了予定

会場

ホテルグランドヒル市ヶ谷(東京都新宿区市谷本村町4-1) ☎03-3268-0117

【交通】JR中央線・総武線・都営地下鉄新宿線、東京メトロ有楽町線「市ヶ谷駅」より徒歩3分

同人会総会

総会・中山純子記念俳句賞表彰 他

全国俳句大会

◆表彰 万象俳句賞  
万象新人賞

◆披露 令和7年度新同人

大会入選作品(特選句には選者染筆贈呈)

会費

一万三千円(昼食代を含む)

申込み

8月20日(水)までに会費を左記へお振込み願います。会費納入をもって参加申込みとします。

・ゆうちょ銀行より振込 ゆうちょ銀行(記号)11300(番号)22149281(通常貯金)

・他の金融機関より振込 ゆうちょ銀行(店名)098(口座番号)2214928(普通預金)

口座名義 コイケキヨハル ☎03-3681-5900

※当日・前日の当ホテルでの宿泊の斡旋はいたしませんので、各自ご手配ください。

※有志吟行会は実施いたしません。大会終了後、別室にて懇親会(希望者による二次会)を予定しています。

## 大会作品募集

作品

一人4句まで(1-3句でも投句可)

「万象」誌(7月号)巻末綴じ込みの投句用紙をご使用ください。(10円切手を貼ってください)

無料 \*締切 8月15日(金)

投句先

〒165-10022 東京都中野区江古田4-12-11 一由久美子 ☎090-4746-18632

令和7年度「万象」全国俳句大会実行委員会

令和7年度「万象」同人会総会

大会委員長 江見悦子  
実行委員長 中村千久  
実行委員長 中條睦子